

松江市文化財調査報告書 第134集

八重垣神社竹矢線竹矢工区地域活力基盤創造交付金(改良)事業に伴う

出雲国分寺跡発掘調査報告書

2010年5月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第134集

八重垣神社竹矢線竹矢工区地域活力基盤創造交付金(改良)事業に伴う

出雲国分寺跡発掘調査報告書

2010年5月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

- 本書は、八重垣神社竹矢線竹矢工区地域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う出雲国分寺跡発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、島根県松江県上整備事務所から松江市教育委員会が委託を受け、財團法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
- 調査地は、島根県松江市竹矢町442-4、453-11、454-6に所在する。
- 現地調査期間は平成21年7月13日～平成21年10月16日、報告書作成期間は平成22年2月1日～平成22年4月30日である。
- 開発面積及び調査面積は、下記のとおりである。

開発面積 706m²

調査面積 469m²

6. 調査組織

【平成21年度】〈調査主体者〉松江市教育委員会		教育長 福島 律子
事務局 文化財課	課長 吉岡 弘行	
〃	調査係長 飯塚 康行	
〃	主幹（指導担当者）赤澤 秀則	
〃	主任（事務担当者）後藤 哲男	
〈調査指導〉 文化庁 文化財部 記念物課 文化財調査官	山下信一郎	
島根県教育委員会 文化財課 主幹	林 健亮	
国立大学法人島根大学 法文学部 教授	大橋 泰夫	
〈実施者〉 財團法人松江市教育文化振興事業団 理事長	松浦 正敏	
埋蔵文化財課 課長	廣江 真二	
〃 課長補佐 錦織 慶樹		
〃 主任（事務担当者）門脇 誠也		
〈調査担当者〉 〃 主任 江川 幸子		
〈調査補助員〉 〃 嘱託員 福光 龍治		
【平成22年度】〈調査主体者〉松江市教育委員会		教育長 福島 律子
事務局 文化財課 課長	錦織 慶樹	
〃 調査係長（指導担当者）赤澤 秀則		
〃 主任（事務担当者）後藤 哲男		
〈実施者〉 財團法人松江市教育文化振興事業団 理事長	松浦 正敏	
埋蔵文化財課 課長	大西 誠	
〃 係長 中尾 秀信		
〃 専門企画員（事務担当者）門脇 誠也		
〈調査担当者〉 〃 主任 江川 幸子		
〈調査補助員〉 〃 嘱託員 北島 和子		

7. 調査に参加した作業員は下記のとおりである。
- (現地作業員) 細田信子、細田勇治、吉岡永子、秦岡富士子、角田ミヤ子、吉岡啓三郎
今村正人、今村邦了、今村ひろ子、金森まゆみ
- (遺物整理員) 田中富士美、江川瀬里余、服部淳子
8. 本書に掲載した遺物の実測・観察は、福光、田中富士美の協力を得て江川がおこなった。
9. 遺物の復元は瀬川恭子がおこなった。
10. 図面の浄書は福光、北島がおこなった。
11. 本書の執筆・編集は、第1章は松江市教育委員会文化財課の協力を得て、第2章を福光が、第3・4章を江川がおこなった。
12. 「国分寺」とは僧寺と尼寺の両方を指す名称であるが、この報告書では、僧寺を「国分寺」、尼寺を「国分尼寺」と称する。
13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標系第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。
14. 本文、図中では、P：小土坑 SK：上坑 SD：溝 SX：性格不明遺構と略称した。
15. 出土遺物、実測図および写真などの資料は、松江市教育委員会において保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章 調査の記録	
第1節 調査方法と調査の経過	4
第2節 調査報告	7
第4章 結語	36
遺物観察表	38
写真図版	
報告書抄録	



第1図 松江市位置図

挿 図 目 次

第1図	松江市位置図	
第2図	出雲国分寺（僧寺）跡位置図	
第3図	史跡指定地と開発予定地、調査範囲の位置関係 (S=1/1000)	
第4図	周辺の地形及び遺跡分布図 (S=1/25000)	3
第5図	調査区配置図 (S=1/1000)	4
第6図	各調査区北壁土層図 (S=1/40)	5~6
第7図	A区遺構平面プラン (S=1/200)	8
第8図	SK01、SK02平面・土層図 (S=1/40)	8
第9図	A1区遺構検出面出土土器実測図 (S=1/4)	8
第10図	A区出土瓦実測図 (S=1/4)	9
第11図	A区出土土器（古墳時代）実測図 (S=1/4)	9
第12図	B区遺構平面プラン (S=1/200)	10
第13図	SX01平面図と北壁土層図 (S=1/40)	11
第14図	SX01出土瓦実測図 (1) (S=1/4)	12
第15図	SX01出土瓦実測図 (2) (S=1/4)	13
第16図	SX01出土瓦実測図 (3) (S=1/4)	14
第17図	SX01出土瓦実測図 (4) (S=1/4)	15
第18図	SX01出土瓦実測図 (5) (S=1/4)	16
第19図	SX01出土瓦実測図 (6) (S=1/4)	17
第20図	瓦敷遺構Ⅰ平面図と北壁土層図 (S=1/40)	18
第21図	瓦敷遺構Ⅰ出土土器実測図 (S=1/4)	18
第22図	瓦敷遺構Ⅰ出土瓦実測図 (1) (S=1/4)	19
第23図	瓦敷遺構Ⅰ出土瓦実測図 (2) (S=1/4)	20
第24図	C区遺構平面プラン (S=1/200)	21
第25図	SD01平面図と北壁土層図 (S=1/40)	22
第26図	SD01部分調査成果図 (S=1/40)	23
第27図	SD01出土土器実測図 (S=1/4)	24
第28図	SD01出土土器・瓦実測図 (S=1/4)	24
第29図	粘土採掘坑平面・土層図 (S=1/40)	25
第30図	C区出土土器実測図 (S=1/4)	25
第31図	C区出土古鉄宍測図 (S=2/3)	25
第32図	D区平面図 (S=1/200)	26
第33図	D区出土土器実測図 (S=1/4)	27
第34図	D区出土瓦実測図 (S=1/4)	27
第35図	D区出土上器（古墳時代）実測図 (S=1/4)	27
第36図	E区平面図 (S=1/200)	28
第37図	E区出土瓦実測図 (S=1/4)	28
第38図	F区遺構平面プラン (S=1/200)	29
第39図	SD02北壁土層断面図	30
第40図	SD02埋土上出土瓦実測図 (S=1/4)	30
第41図	SD02東側土手上面出土瓦実測図 (S=1/4)	31
第42図	瓦敷遺構Ⅱ平面図と北壁土層図	32
第43図	瓦敷遺構Ⅱ出土瓦実測図 (S=1/4)	33

第44図 F区遺物包含層出土土器実測図 (S=1/4)	34
第45図 F区地山面出土土器（古墳時代）実測図 (S=1/4)	34
第46図 F区地山面出土土製品実測図 (S=1/4)	34
第47図 F区遺物包含層出土瓦実測図 (S=1/4)	35
第48図 出雲国分寺跡寺域区画溝推定位置図 (S=1/1000)	37

写真図版目次

図版1 (上) 出雲国分寺史跡指定地 (南から) (下) 調査前近景 (西から)	図版8 (上) D区完掘状況 (南西から) (下) D区北壁土層
図版2 (上) A区調査終了後 (西から) (下) B区北壁土層	図版9 (上) E区完掘状況 (東から) (下) SD02北壁土層
図版3 B区遺構 (西から) (手前がSX01、奥が瓦敷遺構I)	図版10 (上) 瓦敷遺構II (南から) (下) 瓦敷遺構II (東から)
図版4 (上) SX01 (東から) (下) SX01 (部分)	図版11 (上) F区北壁土層 (下) F区土師器出土状況
図版5 (上) 瓦敷遺構I (西から) (下) 瓦敷遺構I (部分)	図版12 (上) 調査完了後全景 (東から) (下) 現地説明会風景
図版6 (上) 瓦敷遺構Iと北壁土層 (下) SD01 (西から)	図版13 出土遺物
図版7 (上) SD01遺物出土状況 (南から) (下) 粘土採掘坑調査終了後 (西から)	図版14 出土遺物
	図版15 出土遺物
	図版16 出土遺物



第2図 出雲国分寺（僧寺）跡位置図



第3図 史跡指定地と開発予定地、調査範囲の位置関係 (S=1/1000)

第1章 調査に至る経緯

出雲国分寺跡は、大正10年3月3日付内務省告示第38号で「史跡出雲国分寺跡」として指定されている。昭和31年、32年に地方史研究所による出雲・隠岐総合調査の中で、石田茂作氏を班長とする「国分寺班」により行われた調査によって、僧坊跡、講堂跡、金堂跡、南門が一直線上に並ぶ東大寺式伽藍であること、さらに塔跡、南門から南方の三軒屋に至る間には幅20尺の石敷道路、南門の東方延長上では土塀の遺構などが確認された。

この結果を受けて、天平古道部分を追加して、昭和35年9月17日付文化財保護委員会告示第39号で「史跡出雲国分寺跡附古道」と改称された。

島根県教育委員会が「八雲立つ風上記の丘」を設置するにあたり、その一環として国分寺跡の整備を行うこととなり、遺跡の規模、構造などを確認するための調査が、昭和45年、46年におこなわれ、この結果から現在の平面表示の復元が行われている。

また、平成元年3月29日付文部省告示第36号で伽藍周辺部分が追加指定を受けている。

その後、「史跡出雲国分寺跡整備基本構想」が平成9年度に策定された。中門や回廊など、一部建物復元も視野に入れた構想であった。これに基づき平成14~17年度にかけて確認調査を実施し、遺構の残存状況が必ずしも良好ではないことを確認してきている。

また、平成12年9月6日付文部省告示第146号で瓦が大量に出土した北側区画溝部分も追加指定を受けている。

一方、出雲国分寺跡の史跡指定地と、天平古道の間には県道八重垣神社竹矢線が東西に横断しているが、交通量の増大により、地元住民から交通路の確保と通学路の確保、史跡見学路の確保のために、道路拡幅が望まれてきた。また、山陰道から風土記の丘地内への誘導ルートとして重要であり、大型バスの乗り入れが可能な幅員を確保する必要もある。

道路拡幅に伴う個人住宅の移転予定地の平成13年度の試掘調査でも遺構が検出されたことから、この個人住宅の移転先を当初の計画地よりも南側に移していただき、遺構検出部分を平成18年度で追加指定（平成18年7月28日付文部科学省告示第118号）を受け、同年度に用地買収をおこなっている。

今回の調査は、県道八重垣神社竹矢線の拡幅に伴い、その拡幅予定地の調査を行ったものであるが、国分寺寺域内である可能性が非常に高かったため、将来的には史跡指定も視野に入れた調査とするため、遺構面の高さを確実に把握し、道路敷設によって遺構が壊されない工法を検討する資料を得ることを目的とした。よって全ての遺構の全掘はおこなわず、必要最小限の範囲で遺構内を確認する調査方法とした。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

出雲国分寺跡（1）は、鳥根県松江市竹矢町442-4・453-11・454-6に所在する。

斐伊川水系の支流にある意宇川は、松江市八雲町熊野の山間部に源を発し北東に流れ、八束郡東出雲町及び松江市を通り中海に注ぐ。この調査地一帯には、意宇川の下流に発達した沖積平野（意宇平野）が広がっており、現在では耕地整理が進んだ田畠が広がる有数の穀倉地帯となっている。

出雲国分寺跡については、以前より発掘調査が行なわれている。平成21年度は、出雲国分寺南門跡の前に伸びている天平古道の東側で、一般県道八重垣神社矢欠線に沿った場所を調査した。

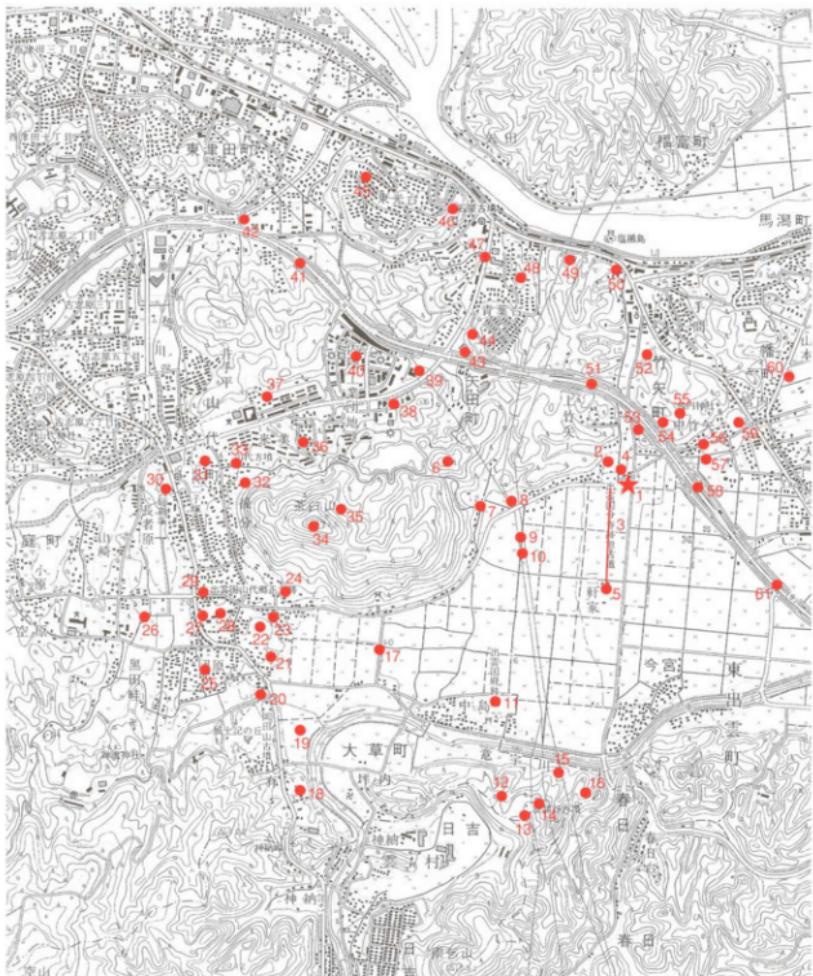
意宇平野の绳文時代の遺跡としては、才塚遺跡（7）・間内遺跡（8）・法華寺前遺跡（57）・さっぺい遺跡（60）・II竹矢小学校校庭遺跡（59）などが知られ、土器が出土している。さらに広範囲では、長元遺跡（35）・保地遺跡（47）・石台遺跡（42）などで数多くの遺物が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、布田遺跡（58）で弥生時代前期から中期にかけての住居跡・溝状遺構・土坑が検出され、銅鐸形土器などが出土している。石台遺跡（42）からは、弥生時代中期から後期にかけての集落跡が発見され、弥生式土器など多数の遺物が出土している。そのすぐ近くにある勝負遺跡（41）からも弥生後期から古墳時代中期にかけての住居跡が確認されている。弥生時代後期の木田跡が、向小紋遺跡（10）・上小紋遺跡（9）・大敷遺跡（61）から確認され、平所遺跡（55）からは弥生時代から古墳時代初頭にかけての玉作工房跡が検出されている。また、弥生時代後期の墳墓として四隅突出型の間内越墳群（44）や米美墳丘墓（40）がある。両者は、茶臼山の山裾で、その間隔は約600mである。

古墳時代の遺跡としては、意宇川周辺の丘陵部に多くの古墳が発見されている。前期としては、小型の方墳を持つ社日1号墳（54）・井ノ奥2号墳（48）が知られている。茶臼山の東側にあり、出雲中央部で同時期としては最大級の廻田1号墳（6）もある。中期になると、大型古墳が意宇川北側や大橋川南岸に多く作られるようになる。石屋古墳（46）は方墳で、形象埴輪や須恵器なども出土している。手間古墳（49）・竹矢岩舟古墳（50）・井ノ奥4号墳（48）はこの時代を代表する大型の前方後円墳である。井ノ奥4号墳（48）では、円筒埴輪・朝顔形埴輪・鶏形埴輪なども出土している。他に、東・西白塚山古墳群（12・13）などの群集墳も作られた。また、集落の遺跡として堅穴建物跡が発見された寺山小田遺跡（39）や堅穴住居跡と掘立柱建物跡が発見された矢出平所遺跡（43）がある。後期になると、茶臼山周辺に古墳が築造される。「頬田部臣」の銘文入りの円頭大刀が出土した岡田山1号墳（20）や御崎山古墳（18）は、前方後円墳で横穴式石室を持っている。石棺式石室を伴うものとしては、山代方墳（33）・古天神古墳（14）・岩屋後古墳（19）なども作られた。また、大規模な横穴群としては、十王免横穴群（38）・狐谷横穴群（36）・安部谷横穴群（16）などが点在している。

奈良時代の遺跡としては、意宇平野南側に出雲国府跡（11）があり、律令政治下で政治・行政を行なった場所である。天平5年（733）年に編纂された「出雲國風上記」には、周辺の公的施設として意宇郡家・駅屋・軍團・正倉などや、正西道（山陰道）と東北道（隱岐への官道）が交わる十字街が書かれていて、山代郷正倉跡（29）・四王寺跡（24）・来美寺跡（37）などがすでに調査確認されている。

小無田Ⅱ遺跡（22）は四王寺の瓦窯跡であったことも明らかにされている。黒田畦遺跡（25）からは出雲国内の郡名である「云石（いのいし）」という墨書き土器が出土している。このような状況の中で、天平13年（741年）に聖武天皇による国分寺建立の詔により、出雲国分寺がこの地域に建立された。



1. 出雲国分寺跡
2. 史跡出雲国分寺跡
3. 天平古道
4. 出雲国分寺付近遺跡
5. 三軒屋遺跡
6. 諏田古墳群
7. 才塚古墳
8. 開内遺跡
9. 上小絞遺跡
10. 向小絞遺跡
11. 史跡出雲国府跡
12. 東百瀬山古墳群
13. 西百瀬山古墳群
14. 古天神古墳
15. 天満谷遺跡
16. 安部谷横穴群
17. 大坪遺跡
18. 御崎山古墳
19. 岩屋後古墳
20. 岡田山古墳群
21. 団原古墳
22. 小無田Ⅱ遺跡
23. 寺の前遺跡
24. 四王寺跡
25. 黒田社遺跡
26. 東源寺古墳
27. 下裏田遺跡
28. 黒田鉢跡
29. 出雲国山代郷正食跡
30. 大庭鍛冶
31. 山代二子塚古墳
32. 水見宅後古墳
33. 山代方墳
34. 茶臼山城跡
35. 長元遺跡
36. 猫谷横穴群
37. 来美魔寺
38. 十王免横穴群
39. 寺山小田遺跡
40. 来美堆丘墓
41. 勝負道路
42. 石台道路
43. 矢田平所遺跡
44. 真内越嶺墓群
45. 東光台古墳
46. 石屋古墳
47. 保地道路
48. 井ノ奥古墳群
49. 手間古墳
50. 竹矢岩舟古墳
51. 才ノ村遺跡
52. 長峯道路
53. 中竹矢道路
54. 社日古墳群
55. 平所遺跡
56. 出雲国分尼寺跡
57. 法華寺前遺跡
58. 布田遺跡
59. 田竹矢小学校校庭遺跡
60. さっぺい道路
61. 夫敷遺跡

第4図 周辺の地形及び遺跡分布図 (S=1/25000)

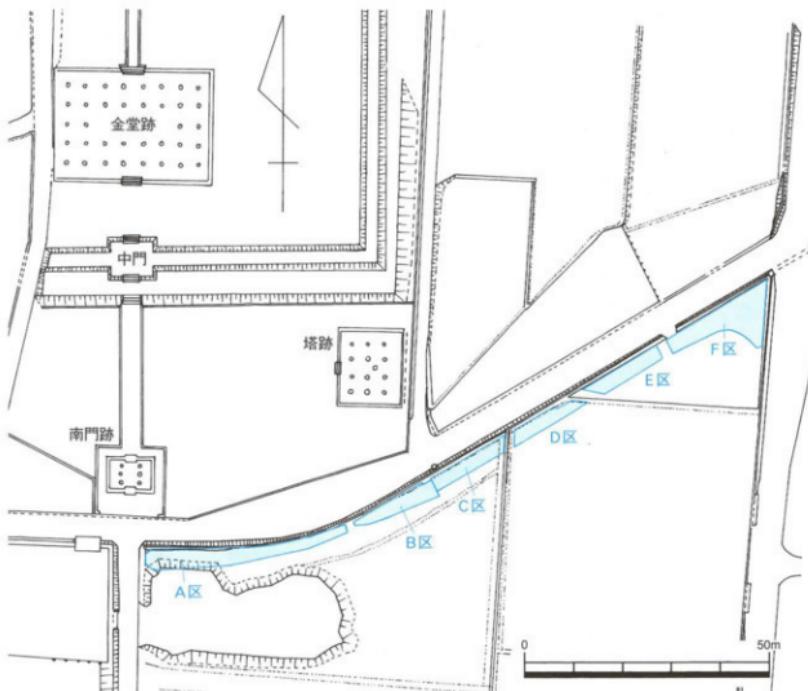
第3章 調査の記録

第1節 調査方法と調査の経過

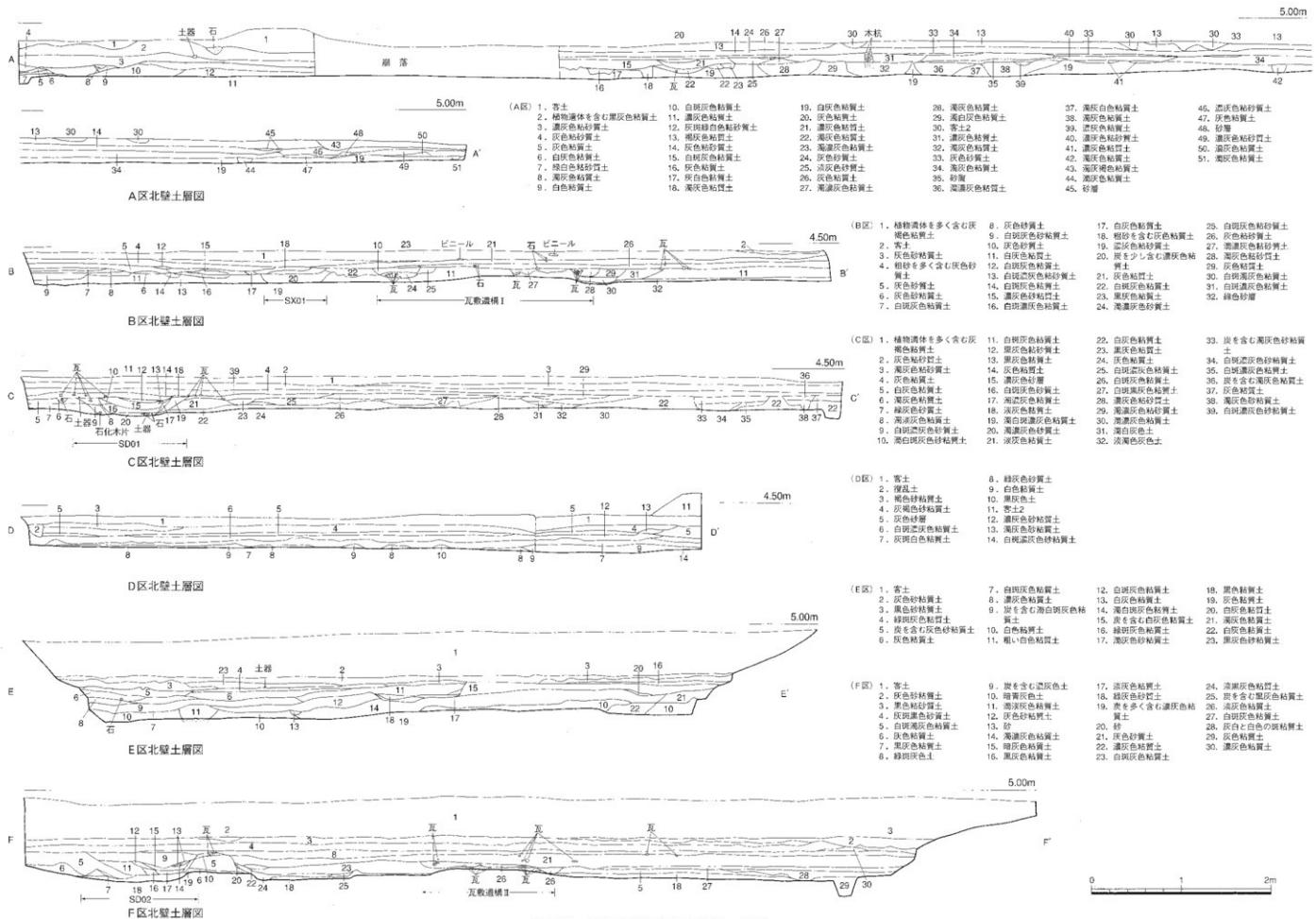
調査地は史跡出雲国分寺跡に南接する県道の拡幅予定地である（第3・5図）。幅は2～5mと狭いが、長さは南西～北東に140mと長く、若干南に張り出して弧を描いている。調査面積は469m²である。

細長い調査区には水路や水道管等で途切れる場所があったので、不均等ではあるがこの境界を利用して調査区に分け、西からA～F区と称した（第5図）。遺物包含層からの出土遺物は調査区ごとに取り上げをおこなった。

現地調査は平成21年7月13日に開始した。掘削範囲は、調査区に北接して流れる農業用水路を保護するため、北辺は水路から約60cm離して掘り下げた。また、南辺は民有地が崩壊しないように、造構面が浅いところは調査対象地の南端から10cm離して掘り下げ、壁面に板材を押し当てて杭で固定した。造構面が深いところでは、調査対象地の南端から30cm離して安全勾配45度の法をつけて掘り下げをおこなった。また、水道管が南北方向に埋設してある場所は周囲を広めに掘り残していたが、「古代の重要な造構に近いため、拡張して土層観察をするように」との調査指導を受けたため、矢板6枚を打設



第5図 調査区配置図 (S=1/1000)



第6図 各調査区北壁土層図 (S=1/40)

して掘り下げをおこなった。

現代の水田床上層や客土層までは小型重機を使用して掘削をおこない、その下はすべて人力で掘削をおこなった。本調査区内では、松江市教育委員会によって平成13年にトレンチ調査が実施されており、国分寺に関連する溝遺構の検出が報告されていたので、その遺構面の深さを参考にして掘り下げをおこなった。ところが、どこも湧き水が多くて遺構精査ができる状況ではなかったので、調査区北辺に約20cm幅の浅い排水溝を掘り、数ヶ所で湧水のポンプアップをおこなった。やや深掘りとなった北辺の壁は、セクションの観察には好都合であった。

掘り下げの結果、多くの遺構平面プランを検出した。史跡出土国分寺跡として将来的に保存すべき遺構群になる可能性が高いという理由から、遺構の掘り下げは最小限にとどめて遺構平面プランの記録をとった。しかし、45度の法をつけて掘り下げた場所では、検出できた遺構面の幅が50cm前後と狭い場所があり、遺構を面的に把握することが困難であった。したがって、そのような場所に限って地山面まで掘り下げ、上層から遺構の有無、性格等の解釈に努めることにした。

記録方法は、遺物出土状況は10分の1縮尺、遺構検出状況・上層図は20分の1縮尺で図面をとり、その都度写真撮影をおこなった。調査区配置図は、平板を利用して100分の1縮尺で作成した。遺構面はほぼフラットなので、コンタ測量は実施しなかった。

平成22年10月10日、一般市民を対象とした現地見学会を開催した。その後、遺構面に露出していた瓦や土器を全て取り上げ、平成21年10月16日、現地における発掘調査を終了した。

第2節 調査報告

【A区】

国分寺南門前から東方に延びる細長い調査区である（第5・7図）。

現代の客土により遺構面までが深く、南辺は45度の法をつけて掘り下げたため、遺構検出面の南北幅は狭い。白灰色粘質土上面で多くの遺構平面プランを検出し、その中から上坑2ヶ所を選定して各々4分の1区画について掘り下げを実施した。

●層序（第6図）

基本的には新旧の水田層が重なり合っている状況である。白灰色粘質土層（17・19）～濁白灰色粘質土層（29・37）上面から多くの遺構が掘り込まれていた。しかし、南門正面付近では現代の搅乱が著しく、ナイロン製品を伴う灰色粘質土層（5）が白灰色粘質土層（17・19）まで達していた。

●遺構と遺物

①土坑SK01（第8図）

平面プランは不整形な円形で、壁はほぼ垂直に下っている。検出面では上端直径1.1×1.2m、深さ12cmを測る。埋土は1層で、性格は不明である。

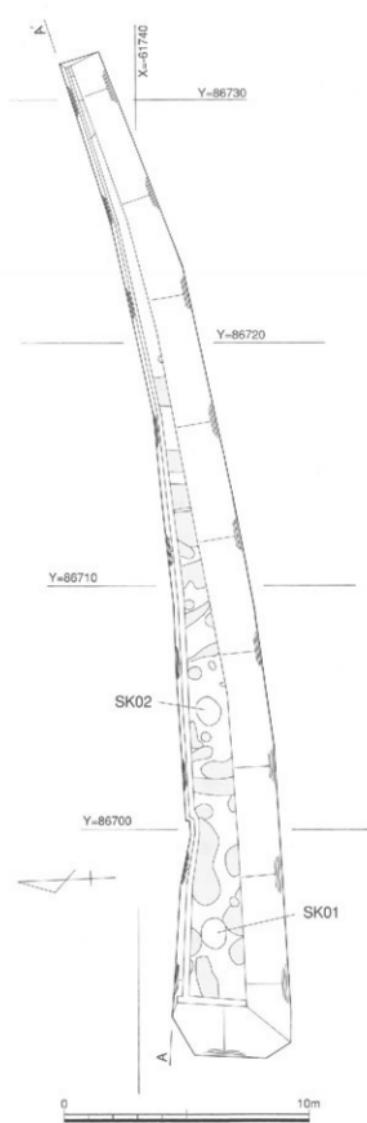
②土坑SK02（第8図）

平面プランは不整形な円形で、壁はほぼ垂直に下がっている。検出面では上端直径1.2×1.3m、深さ22cmを測る。埋土は2層で、特に遺構検出面では炭の出土量が多かった。性格は不明であるが、床面より若干高いレベルで、古墳時代後期の土師器壺破片1点（第11図-3）が出土した。

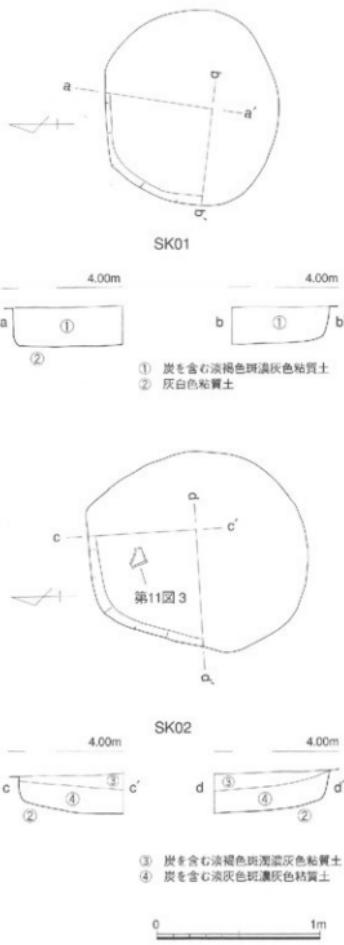
③遺構に伴わない遺物

須恵器（第9図）

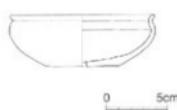
遺物包含層から破片が数点出土したが、図化できたのは壺1点である。口径11.8cm、底径6.0cm、器



第7図 A区遺構平面プラン ($S=1/200$)



第8図 SK01、SK02平面・土層図
($S=1/40$)



第9図 A区遺構検出面出土土器実測図
($S=1/4$)

高4.2cmを測り、高広編年IV Aの範疇に入る。

瓦（第10図）

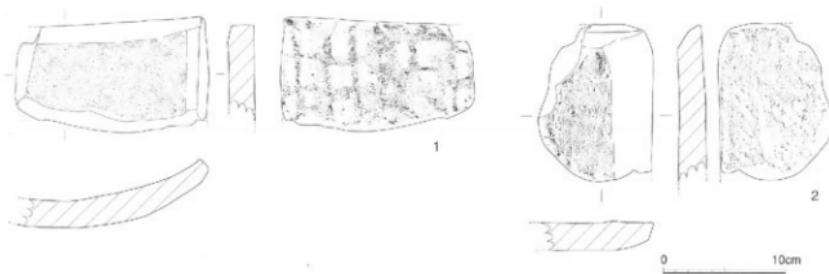
風化が著しい小片が10数点出土した。1・2とも平瓦である。

土器（第11図1・2・4）

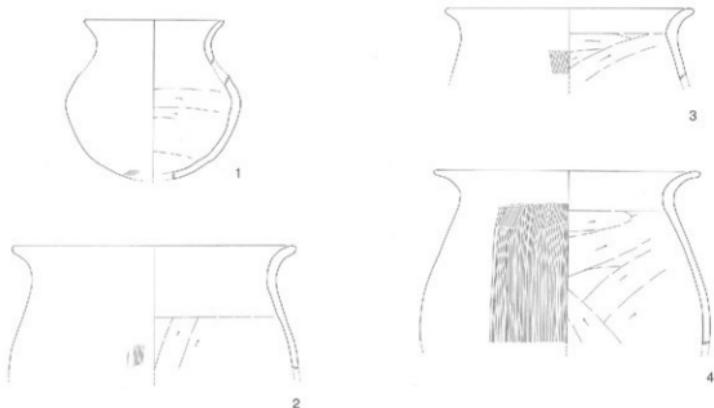
比較的大きく、残りの良い破片が出土した。1・2・4は白灰色粘土に埋まったような状況で出土した。1は小型の壺で、口径11.8cm、頸径6.0cmを測る。2は壺で口径23.2cm、頸径20.0cmを測り、4は壺で口径21.8cm、頸径17.4cmを測る。いずれも古墳時代後期の土器である。

【B区】

塔跡の南方18~25mに位置する調査区である（第5・12図）。比較的浅いレベルから、完形の丸瓦を含む性格不明の遺構SX01と瓦敷遺構Iを検出した。



第10図 A区出土瓦実測図 (S=1/4)



第11図 A区出土土器（古墳時代）実測図 (S=1/4)

●層序（第6図）

現代の水田層の直下に薄い灰色粘砂質土（26）があり、その直下が瓦敷遺構Iの造作された灰白色粘質土（8）となっている。現地表面から遺構面までの深さは浅い。

●遺構と遺物

①性格不明の遺構SX01（第13図）

灰白色粘土層上面で、黒灰色粘質土が不整形に入り込んだ平面プランを検出した。北壁の上層を見ると、黒灰色粘質土（第11）は幅1.4m、深さ0.2mを測る緩やかなU字状に入り込んでいる。ところが、南端での黒灰色粘質土の幅は約3mと広がっており、北端とは様相が異なる。遺構の西端ラインはほぼ真北ラインと合致している。

SX01は調査区の北方と南方に延びていることは確実であり、検出した遺構平面プランは全体の内の一部でしかない。遺構の西端は真北に近いが、北壁に接する排水溝以外は遺構の掘り込み調査は実施していないため、遺構の性格は不明である。

SX01の遺構検出面からは、完形または完形に近い丸瓦が10点、若干欠けた平瓦が1点出土した（第14～19図）。完形の丸瓦はいずれも行基式で、焼成が悪い土師質である。法量も、全長35.0～36.8cm、幅15.4～17.0cm、最大高7.4～8.7cm、最大厚1.7～2.3cmに収まって近似している。同時に焼かれたものが、一括してこの場所に運ばれた可能性が高い。

完形の丸瓦の出土点数が多く、平瓦や小さい瓦片の出土割合が少ないことがSX01の特徴である。瓦のほかに時期を確定できる遺物は出土しなかった。

②瓦敷遺構I

SX01の約2m東に位置する。

調査区の南端から北端まで、東西幅3.5mの範囲に大量の瓦片が敷かれた遺構である（第20図）。瓦片（第22・23図）は全て風化が著しく、須恵器片（第21図）や自然石も混入しており、その密度は場所によってばらつきが見られた。遺構の西端には瓦敷の範囲と平行して幅50～60cm、深さ10cmの溝が掘られており、溝の中には多くの瓦片が落ち込んでいた。したがって、この溝は瓦敷遺構Iと同時期に存在した一連の遺構と考えられる。

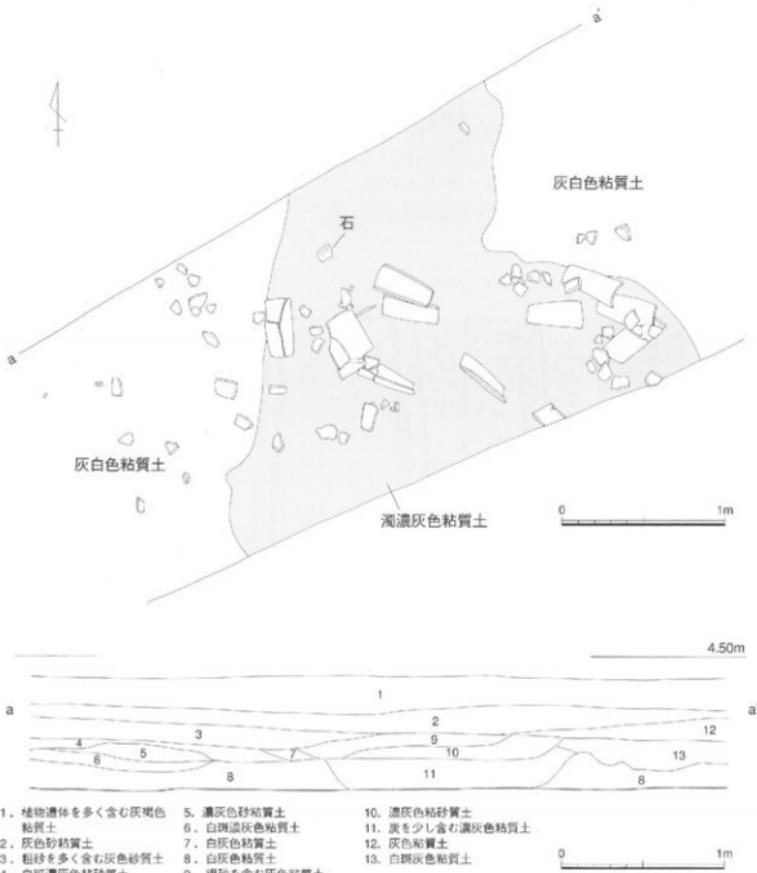


第12図 B区遺構平面プラン (S=1/200)

西端の溝はほぼ南北方向に掘られているが、調査区半ばから北で若干西へ曲がっている。瓦敷遺構Ⅰ自体も同じ方向性をもって調査区外に延びている可能性が高い。

瓦敷遺構Ⅰを北壁の土層で観察すると、瓦片等が敷かれた東西幅3.5mの範囲は、周囲よりも灰白色粘土（第20図-10）が約10cm高く残されており、上面は標高3.50mを測る。この遺構が存在していた時、西端にある溝の深さは40cmと深かったようである。

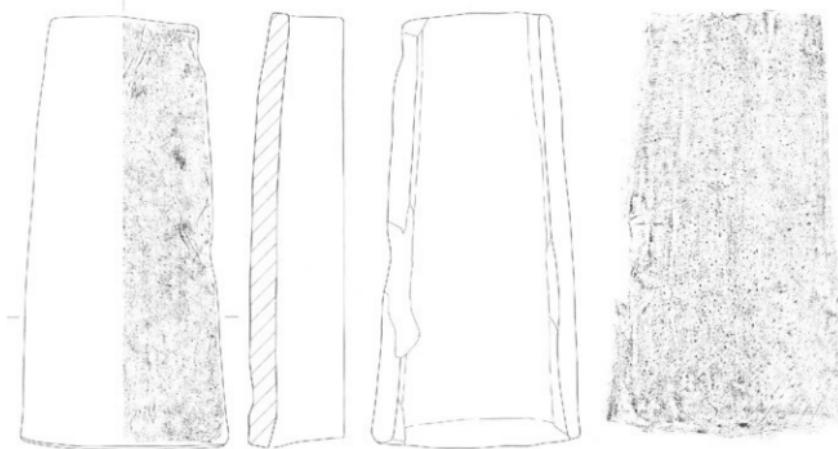
また、瓦敷遺構Ⅰの東側にも瓦が混入する落込み（12）が存在したが、深さは15cmと浅く、平面調査では関連遺構を検出できなかった。9層の下にもさらに深い落込みの層（14・15）を確認したが、瓦を取上げた後に観察すると平面プランは円形の土坑状を呈していた。この遺構埋土中には瓦片が含まれていなかったので、瓦敷遺構Ⅰより古い時期の遺構と考えられる。



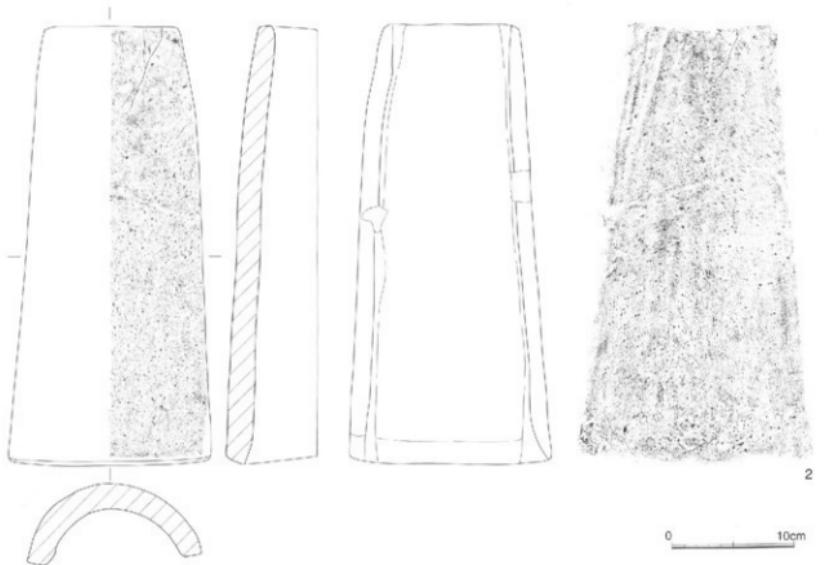
第13図 SX01平面図と北壁土層図 (S=1/40)



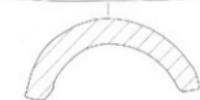
第14図 SX01出土瓦実測図 (1) (S=1/4)



1

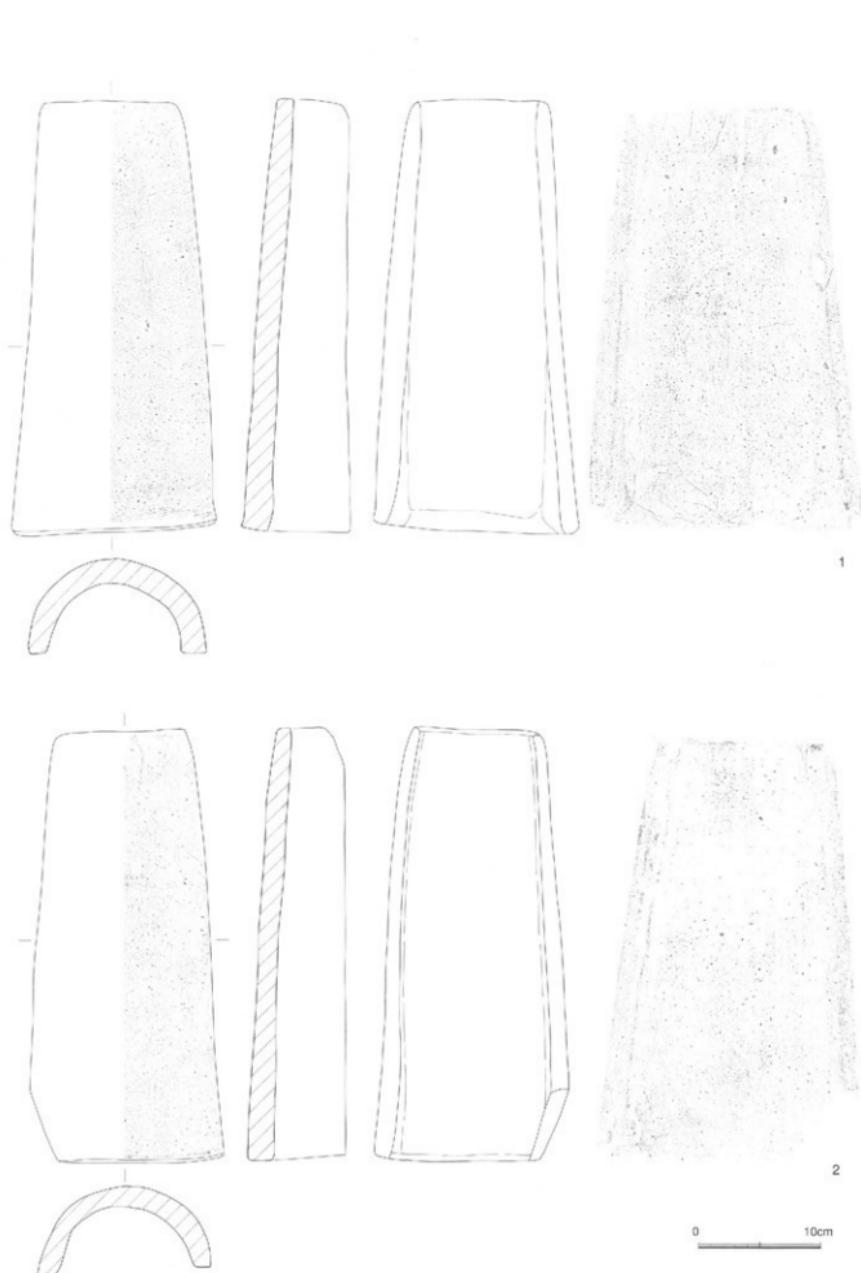


2



0 10cm

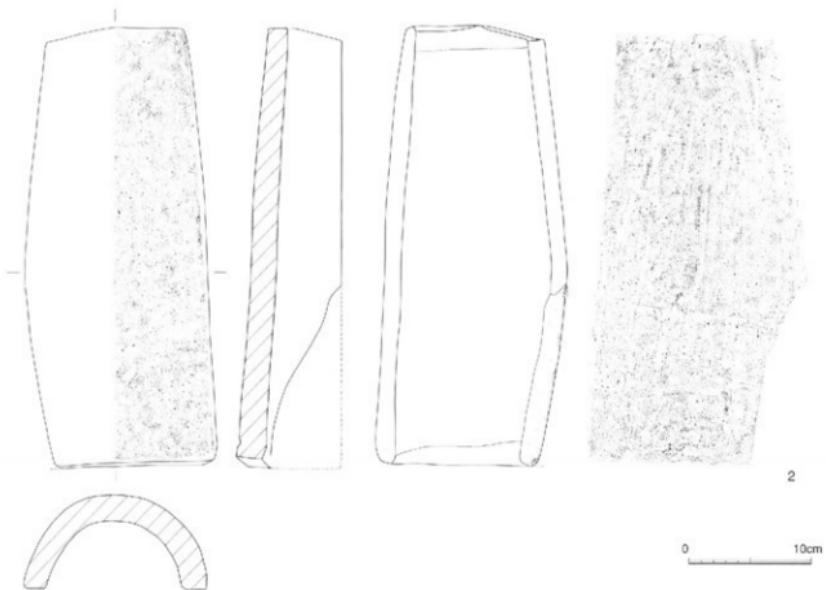
第15図 SX01出土瓦実測図 (2) (S=1/4)



第16図 SX01出土瓦実測図（3）(S=1/4)



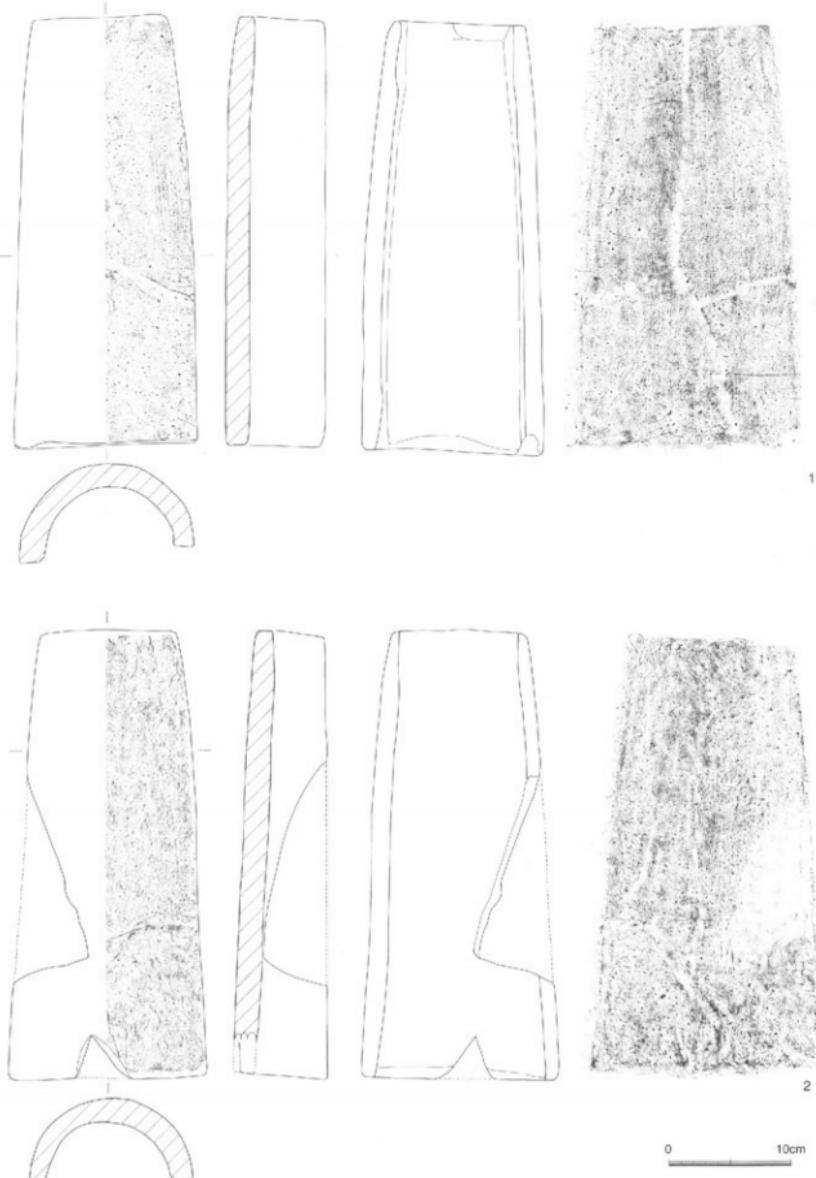
1



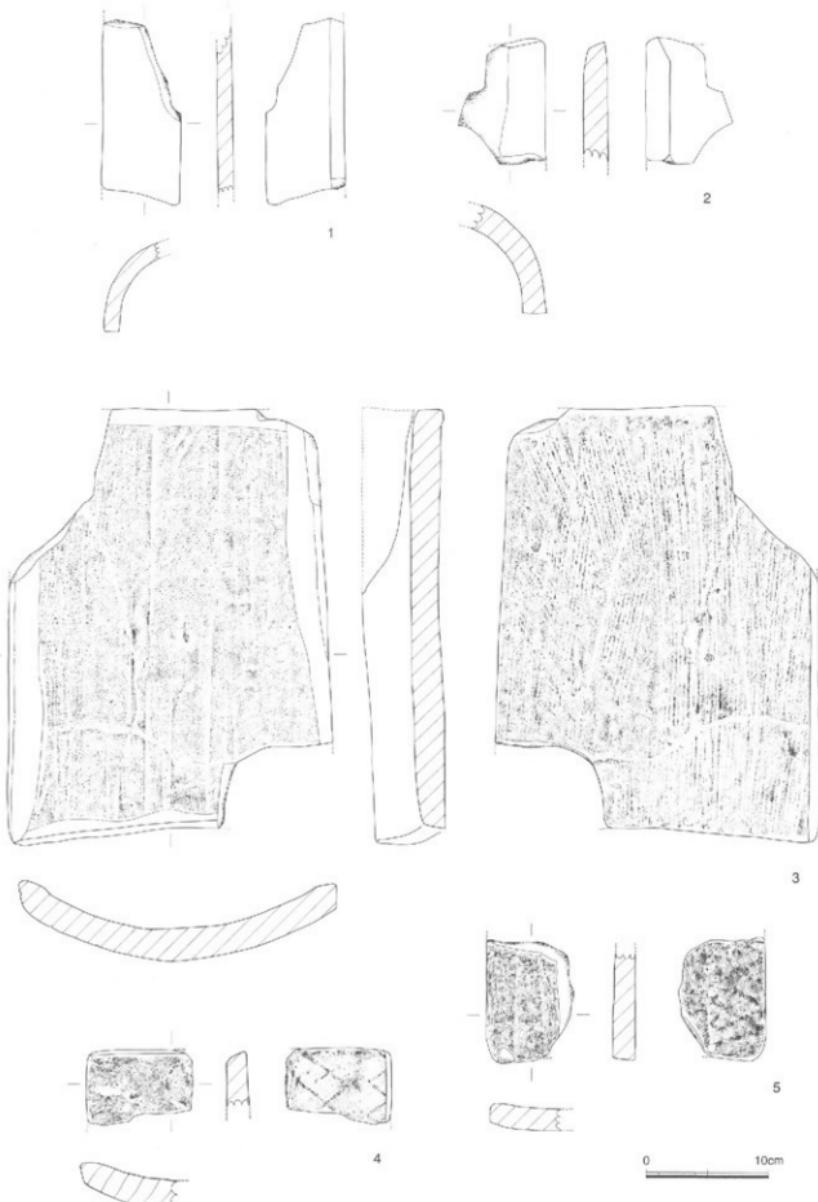
2

0 10cm

第17図 SX01出土瓦実測図(4) (S=1/4)



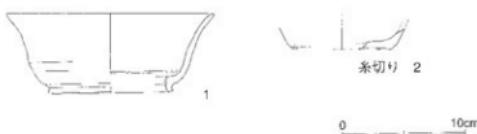
第18図 SX01出土瓦実測図（5）（S=1/4）



第19図 SX01出土瓦実測図（6）（S=1/4）



第20図 瓦敷遺構 I 平面図と北壁土層図 ($S=1/40$)



第21図 瓦敷遺構 I 出土土器実測図 ($S=1/4$)



第22図 瓦敷遺構 I 出土瓦実測図 (1) ($S=1/4$)



第23図 瓦敷遺構 I 出土瓦実測図 (2) (S=1/4)

瓦敷遺構Ⅰからは須恵器の壺の破片2点が出土した。第21図-1は口縁が緩やかに外反して高台がつき、2は底部が糸切り平底のタイプである。瓦は丸瓦、平瓦とともに大量の破片が出土したが、すべて小さく風化が著しかった。国分寺1類の軒丸瓦（第22図-1・2）、瓦当に格子タタキが施された国分寺4類の軒平瓦（第23図-1）を確認した。

【C区】

南門跡から東にラインを引くとこの調査区内を通る。平成13年のトレンチ調査で東西方向の溝平面プランが検出されており、寺域を区画する施設の存在が推定される場所である（第5・24図）。

平成13年の調査で検出された溝SD01と、その東に広がっている白灰色粘質土上面で土坑の平面プラン8基を検出した（第24図）。土坑平面プランは8基確認したが、その中から3基を選定して各々4分の1区画について掘り下げを実施した。

●層序（第6図）

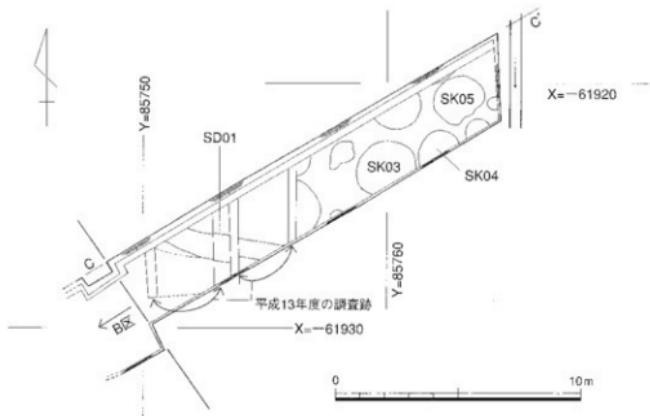
ビニール類を含む現代の水田層（1～4）のほぼ直下に白灰色粘質土（22）があり、その上面が遺構検出面である。

●遺構と遺物

①溝SD01（第8図）

白灰色粘質土上面で溝SD01の平面プランを検出した。平面プランの最大幅は1.2mを測る。検出面は現代遺物を含む白斑灰色粘質土（第25図5）、濁灰色砂粘質土（第25図3）の直下であったため、SD01の上部は削平されている。

SD01は灰色粘質土～濁灰色砂層が入った平面プランとして確認したが、その方向は東西ではなく、西側でやや北方向にカーブしている。西方では濁淡灰色粘質土が入った平面プランもあり、北壁の上層断面から、これが古い時期の溝埋土であることが判明した。年月を経て溝の若干流路が変化したようである。古い時期の平面プランであれば、SD01はほぼ東西方向に掘られていた溝と理解できる。したがって、このSD01が南門から東へ延びる溝、寺域を区画する1施設である可能性は高い。

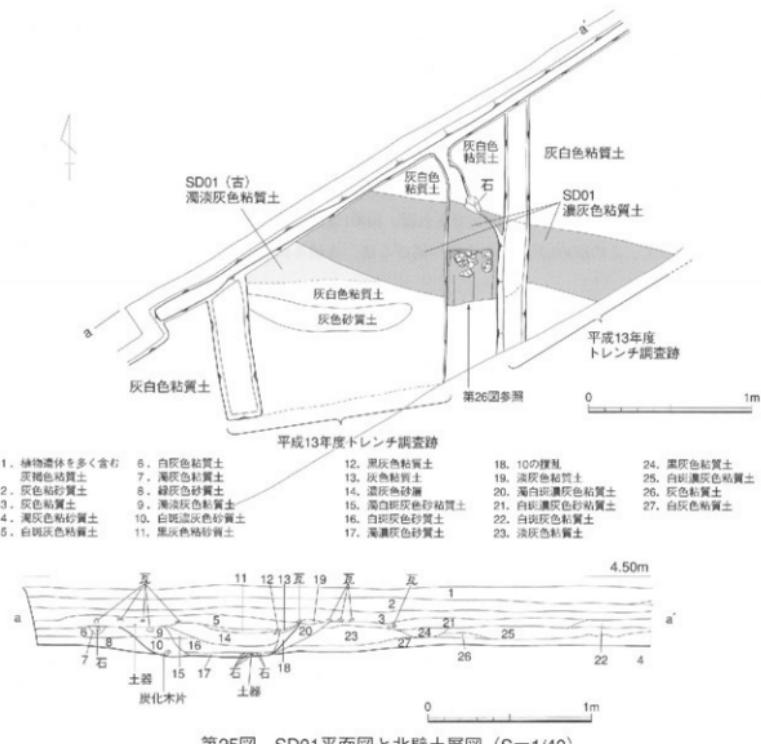


第24図 C区遺構平面プラン (S=1/200)

次にSD01の南半分について幅50cmの範囲で掘り下げをおこなった（第25・26図）。検出面からの深さは0.4mを測り、横断面は緩やかなU字状を呈していた。埋土は砂層と粘質土層が複雑に堆積していたので、水が流れたり浸んだりしていたことが窺われた。水の流れる素掘りの溝であるから、元来は直線であった溝が年月を経て溝が蛇行していたとしても不思議はない。

掘り下げをおこなった範囲は50×60cmと狭かったが、完形および完形に近い土師質土器3点（第27図-1～3）のほか、土師質土器の破片、須恵器の小片、磚、瓦と多数の遺物が出土した（第26図）。

第27図-1は底部直上から出土した土師質土器の高台付环で、环部は丸みを帯び、高台が厚くて高い。全面に朱が塗布されていた痕跡があり、口径11.4cm、底径7.9cm、器高6.6cmを測る。2もほぼ底部直上から出土した土師質土器の高台付环で、环部は丸みを帯び、高台が高い。口径13.6cm、底径7.7cm、器高6.4cmを測る。3は若干溝底部から浮いて出土した土師質土器の高台付环で、环部は丸みを帯び、口縁部はやや外反し、高台が高い。完形で出土したが、風化が著しく、取り上げの時点できなり消滅してしまった。口径14.0cm、底径8.7cm、器高7.0cmを測るが、器面剥離が著しく、団面の厚みは本来の2分の1程度である。1～3はいわゆる足高高台の环で、時期はいずれも11世紀前半と



第25図 SD01平面図と北壁土層図 (S=1/40)

考えられる。4～8、10は溝底部から浮いた状態で出土した土師質土器の破片である。4は丸みを帯びた壺の一部で口径15.1cm、6は立ち上がりが直線的な壺で口径15.0cmを測る。5、7は高台付壺の底部破片である。8～10は須恵器で、8は器壁が厚い高台付の皿で、口径15.2cmを測る。10は無高台の壺底部で、底径6cmを測る。9は須恵器の盤で口径20.6cmを測る。

第28図の1は磚、2は丸瓦、3は平瓦の破片である。

SD01の底部から11世紀前半の土師質土器3個体が完形で出土したという事実は、11世紀前半以降は溝の底部に堆積した土が除去されることも無く、手入れされない状況となつたことを示すと考えられる。狭い範囲の掘り下げ調査であったが、大きな成果を得ることができた。

②土坑SK03（第29図）

白灰色粘質土層上面で、直径2m強の不整形な円形平面プランとして検出した。

全体の4分の1について調査をおこなったところ、中心部が最も深く、遺構検出面からの深さは32cmであった。土層は2層に分けることができ、上層が濁灰色土、下層が濁黒灰色土である。これは、近くの中竹矢遺跡で多数発見された粘土探掘坑に近似していることから、粘土探掘遺構と判断する。埋土中から遺物が出土していないため採掘時期は不明である。

③土坑SK04（第29図）

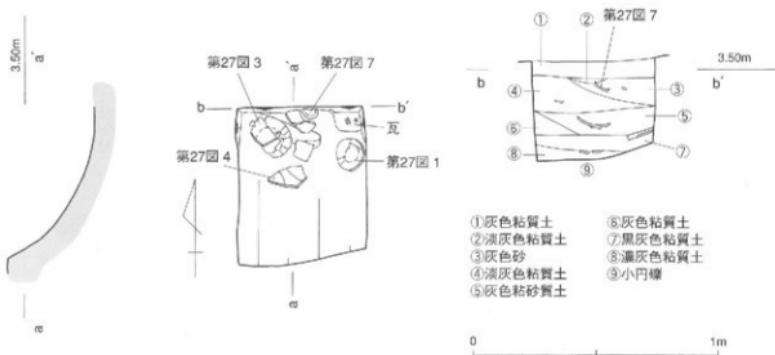
白灰色粘質土層上面で、直径1.4m強の不整形な円形平面プランとして検出した。

全体の4分の1について調査をおこなったところ、遺構検出面からの深さは44cmであった。土層はSK03より複雑になっているが、最下層が濁黒色粘砂質土となっている点はSK03と近似している。これも、粘土探掘遺構と判断する。埋土中から遺物が出土していないため採掘時期は不明である。

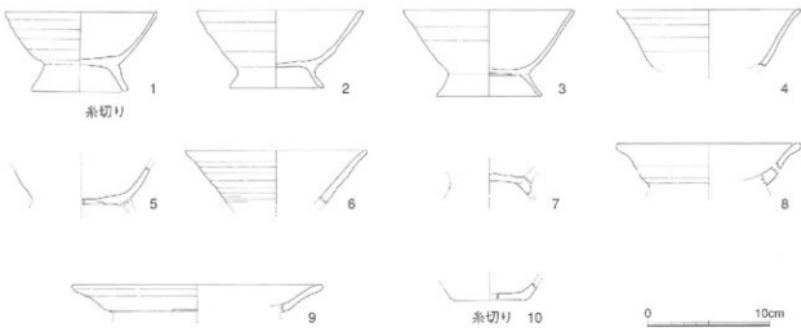
④土坑SK05（第29図）

白灰色粘質土層上面で、直径1.8m強の不整形な円形平面プランとして検出した。

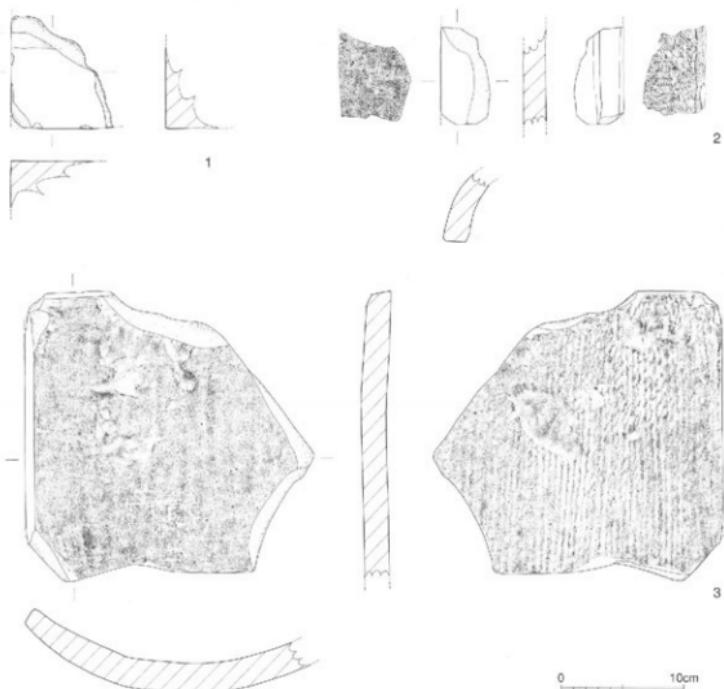
全体の4分の1について調査をおこなったところ、遺構検出面からの深さは20cmであった。土層は複雑であるが、下方に位置する2層が濁黒灰色土である点は前記した土坑2基と近似している。これも、粘土探掘遺構と判断する。SK05の中心部には地山の緑灰色砂質土が露出しており、その時点で掘り下げを中止している。埋土中から遺物が出土していないため採掘時期は不明である。



第26図 SD01部分調査成果図 (S=1/40)



第27図 SD01出土土器実測図 (S=1/4)



第28図 SD01出土埴・瓦実測図 (S=1/4)

③遺構に伴わない遺物

須恵器（第30図）

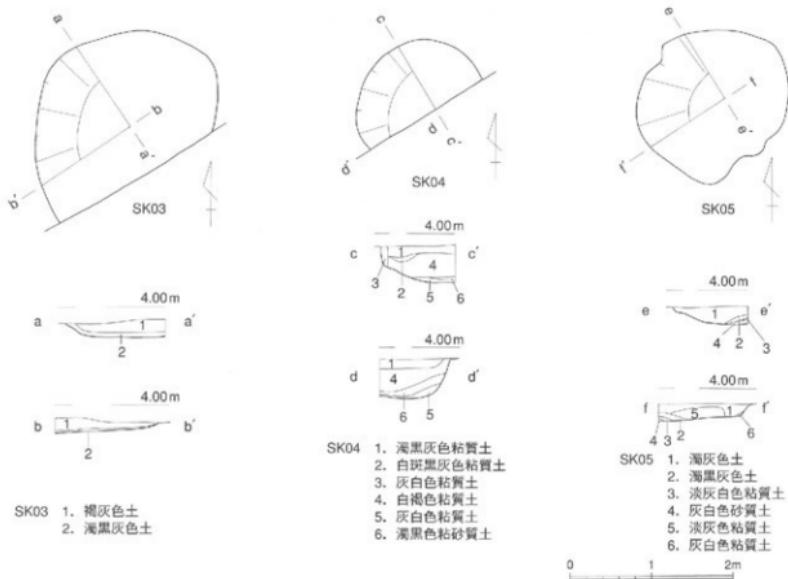
白灰色粘土の上面付近から出土した壺である。高広編年ⅣA期にあたる。

古銭（第31図）

白灰色粘土の上面付近から、3枚の古銭が銷びて離れない状態で出土した。両側面は明錢の洪武通寶で、中の1枚は不明である。3枚とも方形の孔の位置にずれが見られないことから、孔に紐を通して縛ってあったものと推察する。

【D区】

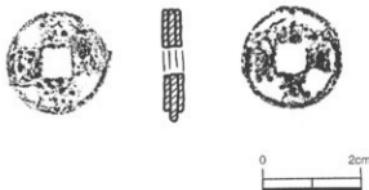
寺域内の南東隅に位置する調査区である（第5・32図）。湧水が特に多い場所で、調査区縁辺に調査用の排水溝を廻らせた。幅広い調査区であるが、遺構は検出されず、出土遺物の量は少なかった。



第29図 粘土探査坑平面・土層図 (S=1/40)



第30図 C区出土土器実測図 (S=1/4)



第31図 C区出土古銭実測図 (S=2/3)

●層序（第6図）

西側は整然とした水平堆積である。国分寺創建時の造成土と言われている灰斑白色粘質土（7）直上まではナイロン類を含む現代の水田層で、その下が白灰色粘質土（9）、その下が地山の緑灰色砂質土（8）となっている。

東寄りでは白斑濃灰色砂粘質土層（14）が入っており、その中から須恵器や瓦片が出土した。

●遺構と遺物

国分寺造成土と理解されている灰斑白色粘質土層（7）上面まで全面掘り下げたが、遺構は検出できなかった。E区寄りの白斑濃灰色砂粘質土（14）中から須恵器片（第33図）、瓦片（第34図）のほか、ふいごの羽口片2点が出土した。

①遺構に伴わない遺物

須恵器

第33図-1は蓋で口径14.2cm、2は高台付きの環で底径12.4cmを測る。3は高台付の皿で、縁壁が厚めで口縁端部に凹線が彫りられており、口径16.4cm、底径13.3cm、器高3.1cmを測る。時期は、高広編年の中ⅣAの範囲におさまる。

瓦

第34図-1は丸瓦、2は裏面に格子目タタキ、3は縦目タタキが施された平瓦である。

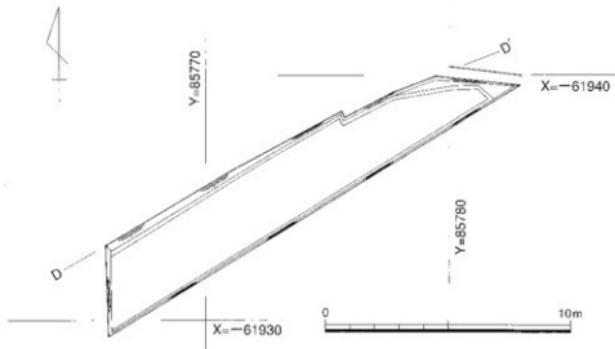
土師器

第35図は白灰色粘質土層から出土した土師器の甕である。単純口縁で、口径20.8cm、頸径14.8cmを測る。同層からは別個体の土師器小片数点が出土した。

【E区】

出雲国分寺地域内の南東隅にあたる調査区である（第5・36図）。

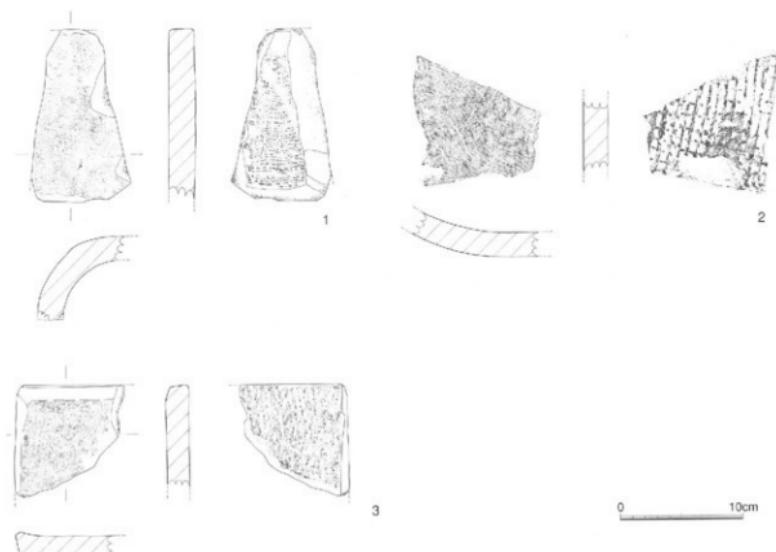
現代の客土により遺構面が深くなっていたので、北辺、南辺とも45度の法をつけて掘り下げた。下方になると南北掘削幅が40~50cmと狭くなったため、平面精査は断念して上層から遺構の有無を観察した。



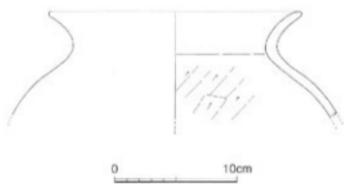
第32図 D区平面図 (S=1/200)



第33図 D区出土土器実測図 (S=1/4)



第34図 D区出土瓦実測図 (S=1/4)



第35図 D区出土土器（古墳時代）実測図 (S=1/4)

●層序（第6図）

白灰色粘質土（10）上の濁白斑灰色粘質土（14）～白斑灰色粘質土（8）が国分寺造成上と解釈されている。その上部から客土層（1）の下までがかつての水田層の重なり合いと思われるが、D区のような単純水平土層とは違って複雑な土層となっている。

●遺構と遺物

遺構は検出されなかった。

①遺構に伴わない遺物

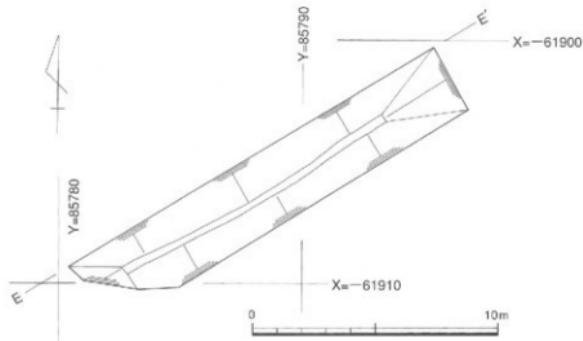
瓦（第37図）

小片10数点が出土した。第37図-1は裏面に格子目タタキが施された平瓦で、厚さ3.5cmを測る。2は裏面に縄目タタキが施された平瓦である。

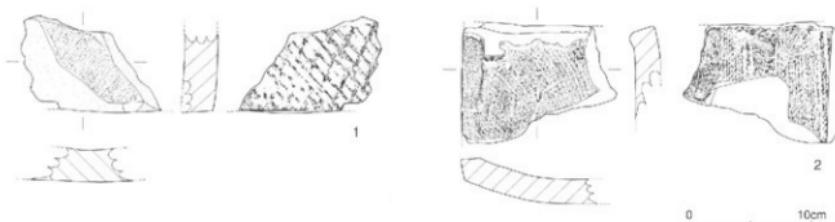
【F区】

国分寺の伽藍中軸線から1町（109m）の地点を含む調査区である（第5・38図）。

本調査区の西側は、現代の客土によって遺構面までが深く、北辺、南辺とも45度の法をつけて掘り下げねばならず、遺構面の南北幅は60cm前後と狭くなったが、伽藍中軸線から1町強の地点で溝跡SD02を検出し、さらにその東側では瓦敷遺構Ⅱを検出した。



第36図 E区平面図 ($S=1/200$)



第37図 E区出土瓦実測図 ($S=1/4$)

●層序（第6図）

地山は緑灰色砂質土（18）で、その上に白灰色粘質土（5）があり、その上面は古墳時代の遺構検出面である。その上に国分寺の造成土といわれている白斑灰色粘質土（5・23）が盛られており、西寄りのSD02付近は高く残存し、5層の上面からSD02が掘られている。この層は東側の大半が古代に削平されて瓦敷遺構Ⅱが造作されている。瓦敷遺構Ⅱ上層の灰色砂質土（21）の性格は不明であるが、その上の緑斑灰色土（8）、灰斑黒色砂質土（4）はややしまった土質で、広範囲に分布することから造成土と考えられる。4層からは奈良平安時代の遺物（第44図-1～5・7・9）のほか中世の中国青磁（第44図-10）、近世初頭の陶器（第44図）が出上したので近世初頭以降の造成と判断できたが、8層は瓦以外の遺物が出上していないため時期は不明である。

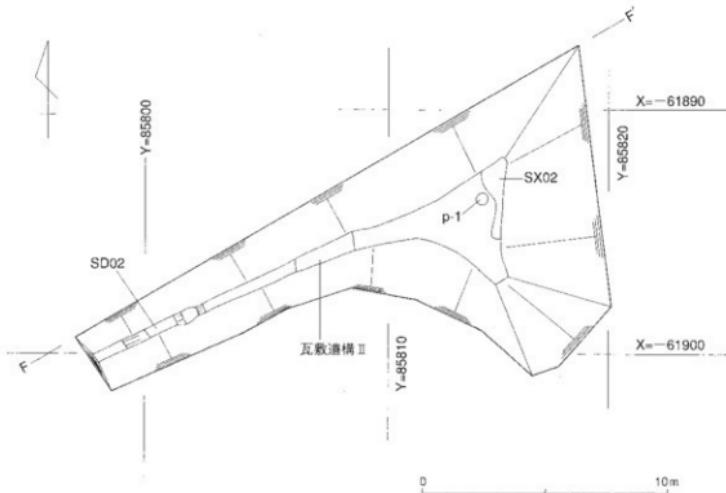
●遺構と遺物

①溝SD02（第39図）

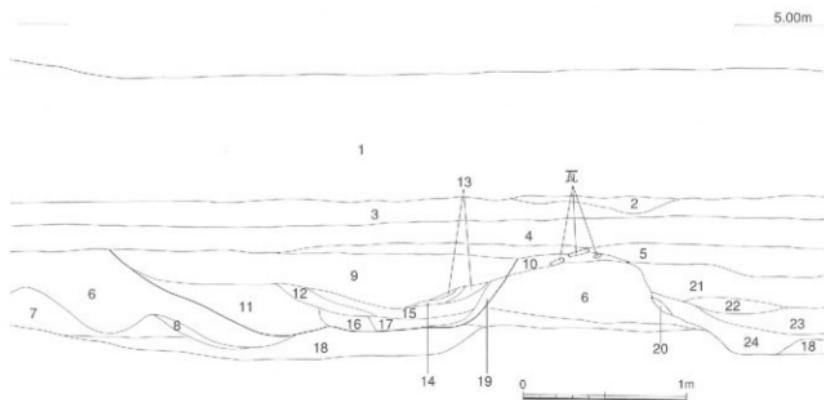
45°の法をつけて掘り下げるところ遺構面の南北幅は40～50cmと狭くなり、湧水も著しかったため、北壁の上部で溝跡SD02を確認した。

SD02は国分寺建立の際の造成土とされている濁白斑灰色粘質土から掘り込まれており、東側の上場には瓦片（第41図）が敷かれていた。検出時の溝上端幅2.4m、深さ43cmを測り、断面はU字状を呈していた。堆積上を見ると、上層は炭を含む濁灰色土（9）1層であるが、その下は濁淡灰色粘質土層（11）と、それを切る多層（12～17・19）から構成された断面U字状の溝断面が確認された。両者には時間的な隔たりが存在するだろう。本来は濁淡灰色粘質土（11）で埋没していった溝に、やや勢いを増した水が流れて侵食が繰り返された結果、多層から成る溝がSD02の東寄りに形成されたものと推察される。

多層から構成された溝を東西方向の断面で観察すると、弓なりに下がる砂層（13）や濁淡灰色粘

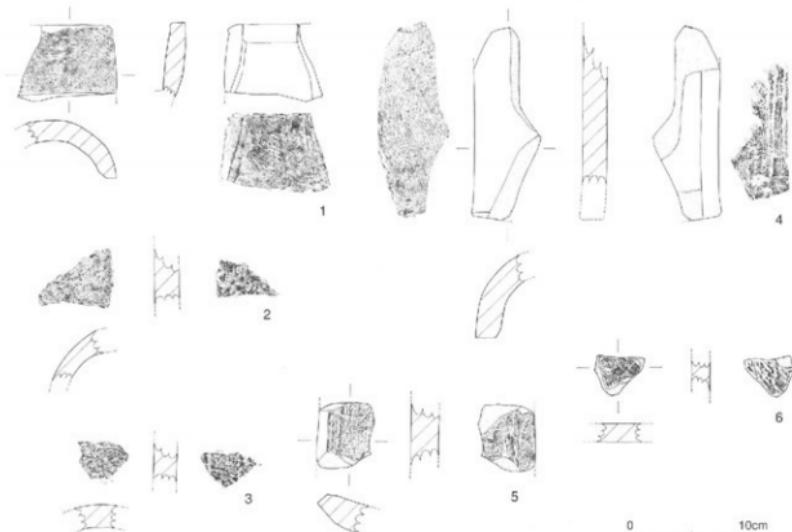


第38図 F区遺構平面プラン (S=1/200)



- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|------------------|-------------|
| 1. 灰土 | 6. 白灰漂灰色粘質土 | 11. 淡淡灰黑色粘質土 | 16. 黑灰色粘質土 | 21. 深色砂質土 |
| 2. 淡色粘結質土 | 7. 灰色粘質土 | 12. 灰色粘結質土 | 17. 淡灰色粘質土 | 22. 淡灰色粘質土 |
| 3. 黑色粘結質土 | 8. 黑灰色粘質土 | 13. 砂 | 18. 棕灰色粘質土 | 23. 白灰灰色粘質土 |
| 4. 深耕黑灰色粘質土 | 9. 黑土含石漂灰色土 | 14. 淡淡黑色粘質土 | 19. 粘土多く含む漂灰色粘質土 | 24. 淡黑灰色粘質土 |
| 5. 深耕灰色土 | 10. 深青灰色土 | 15. 淡灰色粘質土 | 20. 砂 | |

第39図 SD02北壁土層断面図



第40図 SD02埋土出土瓦実測図 (S=1/4)

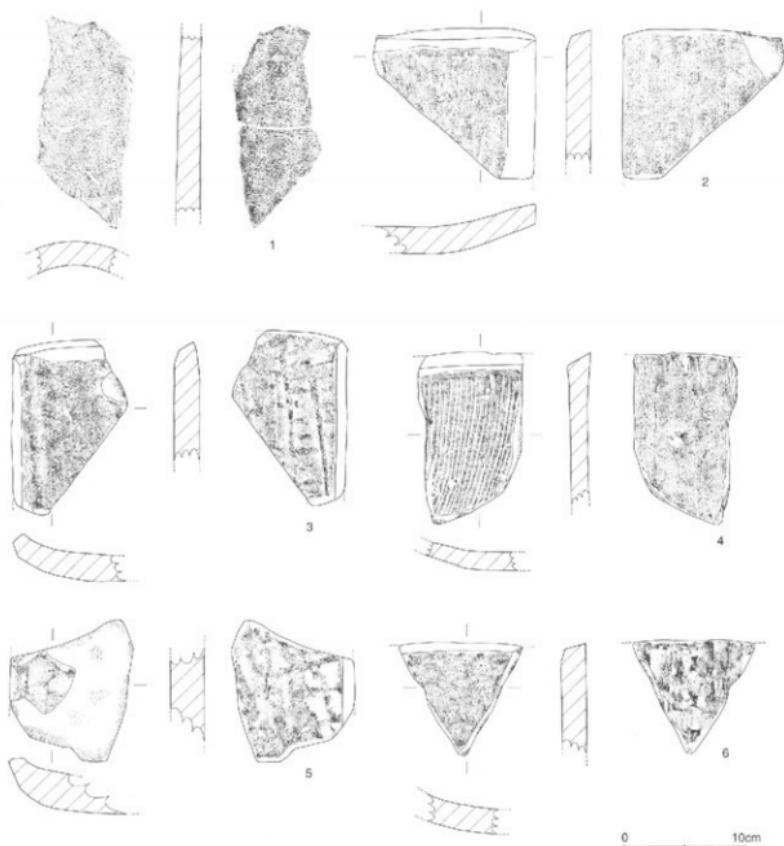
質上層(14)が確認された。南北方向に掘られた溝で、砂が流れる程度に水量のある時期と濁んで濁灰色粘質土が沈殿する時期を繰り返していたことが窺われる。堆積土中からは瓦の小破片(第40図)が出土した。

SD02が検出された地点は、まさに伽藍中軸線から1町強の地点である。そして、以前の調査によって北方150m地点で検出された溝、及び南方30m地点で検出された溝とを繋いだライン上に位置している(第12図)。これをもって国分寺の寺域東限を画する一施設と考えたい。

②瓦敷遺構Ⅱ(第11図)

溝SD02の東端から東へ4.5m地点に位置している。

東西方向の幅2.6mの範囲に小さな瓦片や須恵器の小破片が敷き詰められた遺構である。この瓦敷遺構は国分寺造成土(第42図-8)を西方で約20cm掘り下げて平坦地を造った後、瓦片や須恵器片



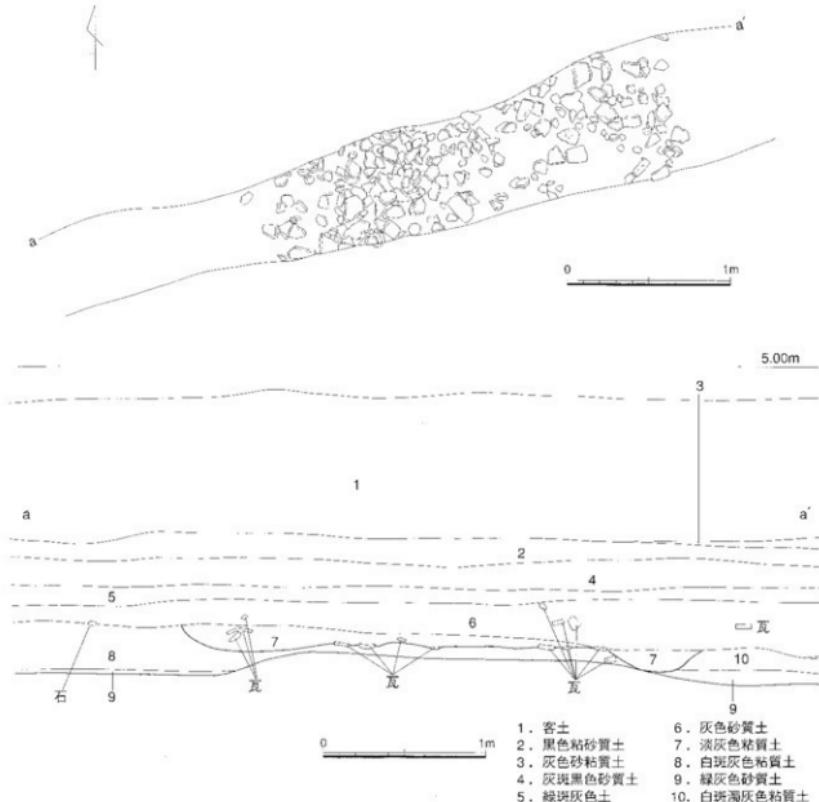
第41図 SD02東側土手上面出土瓦実測図 (S=1/4)

を敷いたものである。瓦敷造構IIの東辺と西辺はほぼ真北と合致するが、南北の調査範囲が狭いため、南北方向へ長く延びるものが単なる瓦溜りなのか、その正体は不明である。

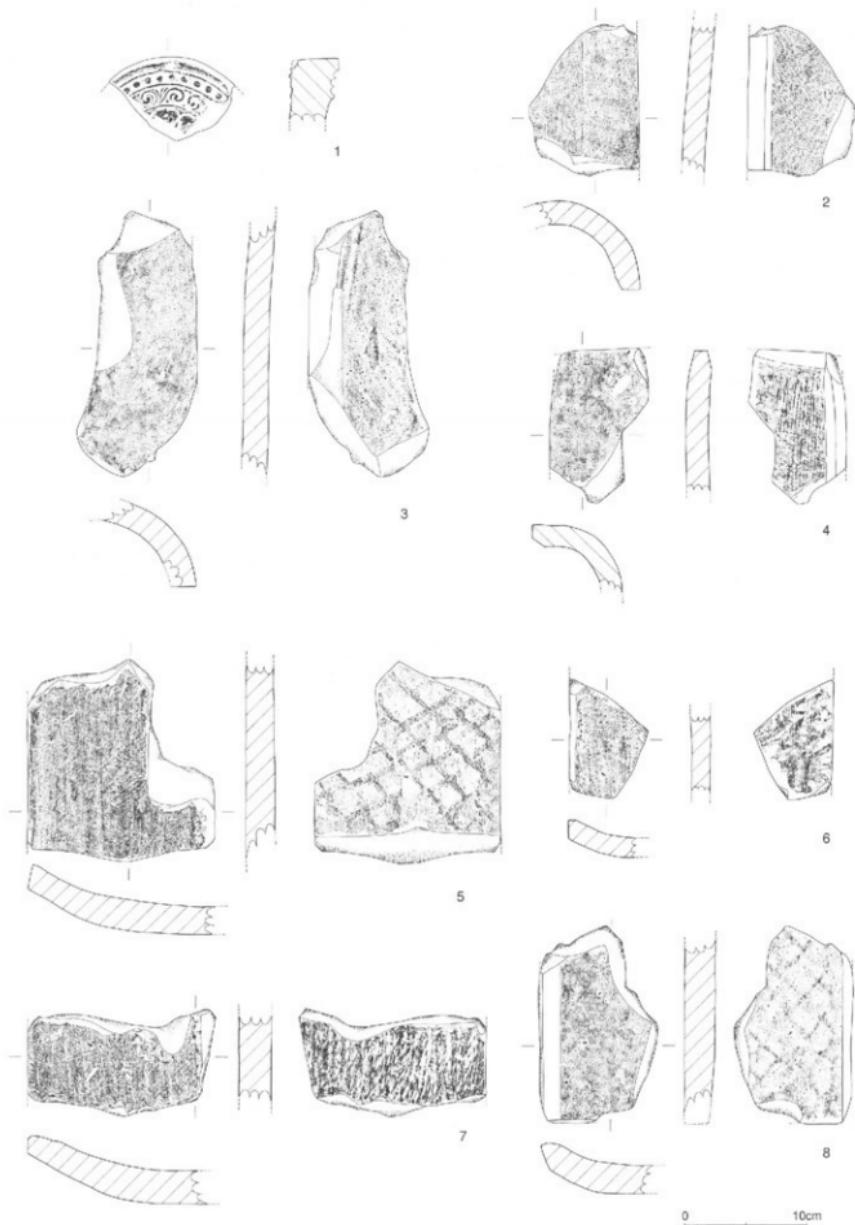
第43図は瓦敷造構IIに使用された瓦で、1～4は丸瓦、5～8は平瓦である。いずれも風化が著しい小片ばかりである。

③奈良時代以前の遺構と遺物

白灰色粘質土層上面から掘られた、ピットP-1と性格不明の落ち込みSX02を検出した（第38図）。P-1は直径38cmである。平面プランだけを記録して掘り下げは実施しなかったので深さは不明である。精査中にP-1から土師器の蓋（第45図）、SX02から土錐（第46図）がほぼ完全な形で出土した。第45図は古墳時代前期の蓋で、口径21.8cm、頸径12.2cm、土錐は長さ3.9cm、最大径1.1cmを測る。



第42図 瓦敷造構II平面図と北壁土層図



第43図 瓦敷遺構Ⅱ出土瓦実測図 (S=1/4)

④遺構に伴わない遺物（第44図）

須恵器

1～5・7は灰斑黒色砂質土（第6図-4）から出土した。1は宝珠つまみが付く蓋で、上面には糸切り痕が残っている。2～4・7は壺の底部で、2は底径9.2cm、3は底径9.2cm、4は底径9.3cmを測り、壺が丸みを帯びるタイプである。7は底径6.6cmを測り、壺部が直線的に立ち上がるタイプである。5は皿の底部で、底径10.5cmを測る。6は灰色砂質土（第6図-21）から出土した壺で、壺部は直線的に立ち上がり、底径9.0cmを測る。8は瓦敷遺構Ⅱ付近の白灰色粘質土（第6図-5）直上から出土した、甕口縁である。外面に雑な波状文が施されている。

土師質土器

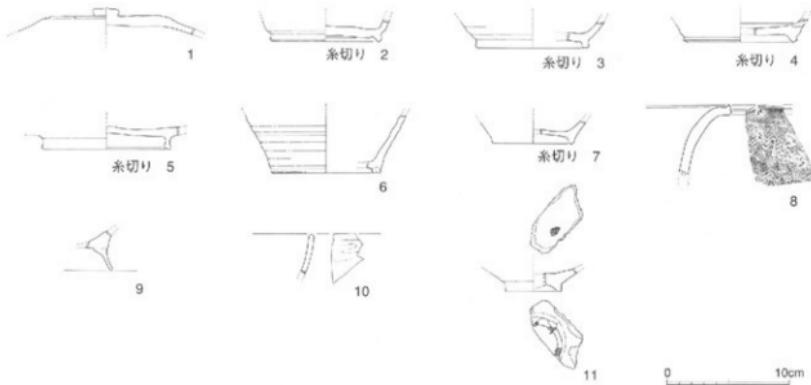
9は灰斑黒色砂質土（第6図-4）から出土した、高台付壺の底部小片である。

陶磁器

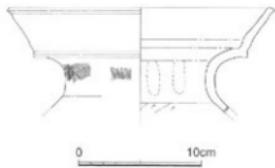
10は灰斑黒色砂質土（第6図-4）から出土した、青磁碗の口縁部分である。中国の龍泉窯製で、外面には雷文が描かれている。11は灰斑黒色砂質土（第6図-4）から出土した、陶器の皿である。全面に施釉されており、砂目が付着している。底部は削り出し高台で、底径4.6cmを測る。

瓦（第47図）

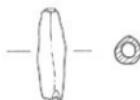
白灰色粘質土（第6図-5）よりも上の層、現代の客土（第6図-1）よりも下の層から満遍なく出土したが、灰斑黒色砂質土（第6図-4）と灰色砂質土（第6図-21）から特に多く出土した。



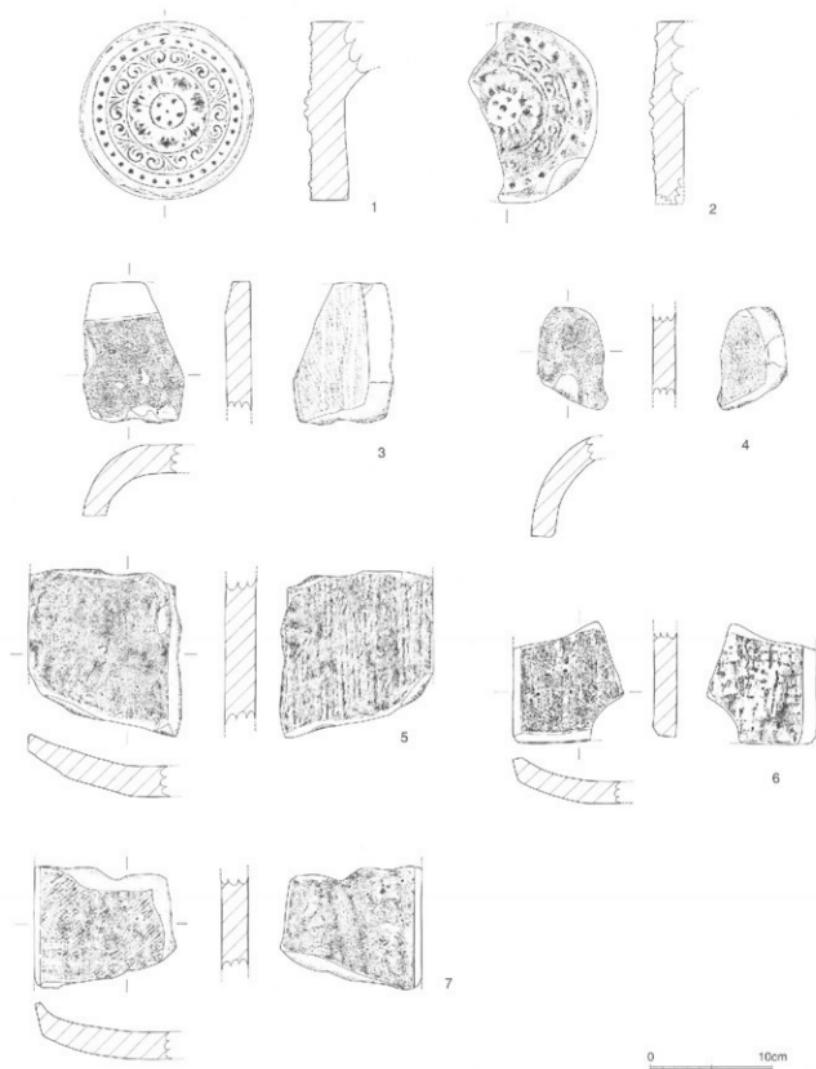
第44図 F区遺物包含層出土土器実測図 (S=1/4)



第45図 F区地山面出土土器（古墳時代）実測図 (S=1/4)



第46図 F区地山面出土土製品実測図 (S=1/4)



第47図 F区遺物包含層出土瓦実測図 (S=1/4)

0 10cm

第4章 結語

奈良時代初頭の内乱や疫病、そして新羅への脅威等から、聖武天皇が鎮護国家を目的に国ごとに国分寺の造営を命じたのは741年である。当時の出雲国国司、石川年足はかねてより仏教に造詣が深い人物であったというから、その詔勅を受けて速やかに国分寺建立事業に着手し、8世紀後半には出雲国分寺が創建されたと考えられている。瓦葺きの巨大な堂塔に20人の僧が配置された国分寺はまさに国の華であったに違いない。

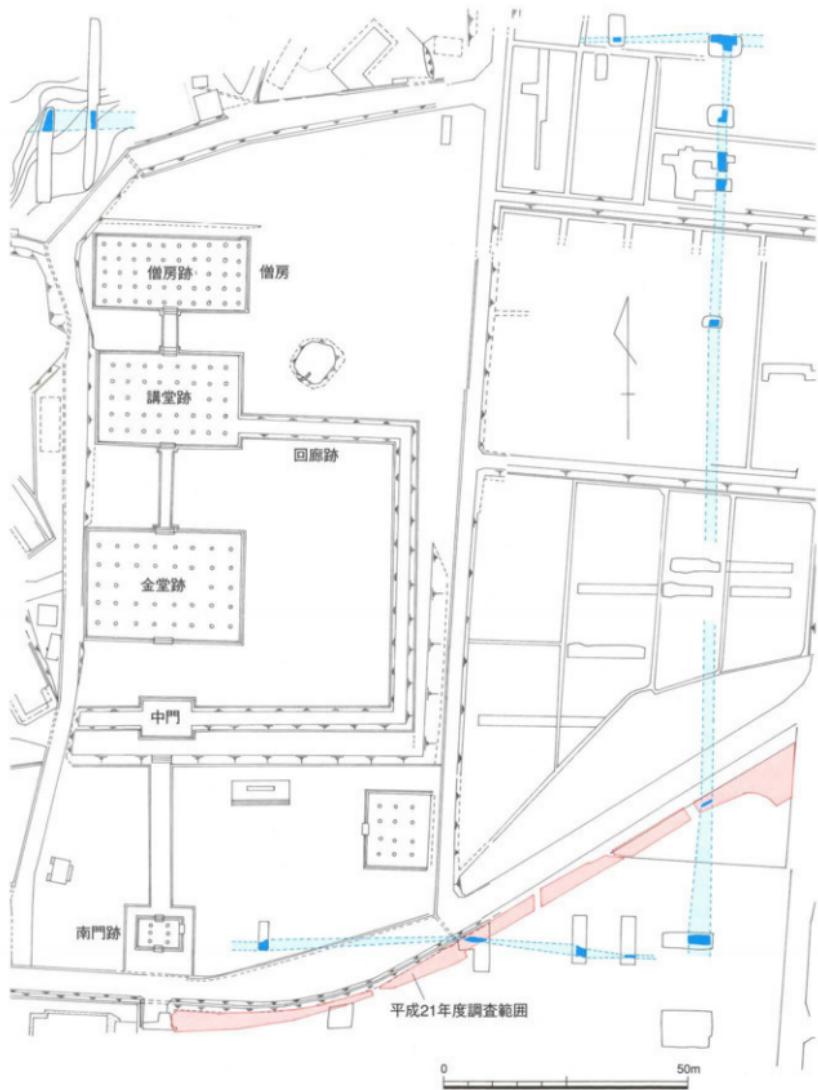
しかし、文献によれば出雲国分寺は江戸時代初頭には既に消失していたという。現在は発掘調査によって中心部の伽藍配置は解明されているが（第48図）、その他の付帯施設や寺域など不明な点も多く残されている。出雲国分寺は創建以降、どのような運命をたどっていったのであろうか。

今回の調査では、南門から東方へ延びる溝SD01と、伽藍中軸線から東へ約1町地点で南北方向に掘られた溝SD02を検出した。溝底部の標高はSD01が3.2m、SD02が3.1mとほぼ同じで、両者とも砂や粘質土が堆積していて水が流れたり濁りだりしていたことが窺えた。2本の溝は松江市教育委員会がこれまでトレント調査で検出していた溝と一直線上に繋がることから、寺域を画する溝と考えられ、東側と南側の寺域の一部が確定できることになる（第48図）。ただし、東門跡が伽藍中軸線からほぼ1町の地点で検出されているのに対し、南北方向に掘られた溝SD02は伽藍中軸線から1町強の地点に配置されていた。このことは、今回の調査では検出できなかったが、溝の内側に何らかの施設が廻らされていたことを示す消極的な状況と捉えることができるであろう。

次に、溝SD01の底部直上から11世紀前半の完形の壺3点が出土したことに注目したい。これは、11世紀前半には国分寺正面の溝に器物が転がっていても何ら違和感が無い状態であったことを示している。その後、溝に泥や砂が堆積しても取除かれることなく放置されて埋没したと考えられ、出雲国分寺の荒廃を窺うことができる。現時点、出雲国分寺が文献に残るのは956年が最後で、それは僧が亡くなつたため代僧の派遣を東大寺に依頼した団牒であった。これにより、出雲国では少なくとも10世紀半ば迄は国分寺の体裁を整えていたことは確実だが、それ以降の出雲国分寺に関する古文書は存在しておらず、発掘調査の成果とのくい違いは見られない。

一般的に平安時代に入ると全国の国分寺は急速に衰退したと言われているが、他国の具体例を見るところ、11世紀前半の『上野国交替実録帳』には「上野国分寺に安置されていた15体の仏像にはことごとく欠失破損個所があり、築地塀や僧坊、南大門、西大門、東大門、大衆院などの施設は失われていた」と記されている（堀池春峰『国分寺の歴史』『仏教芸術』1975年）。出雲国分寺でも上野国分寺と似たような状況であったことは想像に難くない。これまでの出雲国分寺発掘調査では、僧房では少なくとも2回、講堂では少なくとも1回の火災の痕跡が確認されている。出雲国分寺跡では14世紀以降の遺物が出土していないことから、14世紀には廃絶していたと言われているが、堂塔や付帯施設はもっと早い時期に荒廃していた可能性は高い。

今回の調査では出雲国分寺の南辺と東辺の寺域と考えることができる溝跡の存在を検出することができた。しかし、その溝は国分寺創建当初からあったものか、東限の溝はいつ頃埋没したのか、解明すべき問題点が新たに生じた。また、溝以外の寺域を画する施設はどのような状況であったのだろうか。南門から東方に向けて築地塀が存在していたという調査結果が報告されているが、図面や写真が現存していないため具体的な遺構の規模や形状は不明である。今後の調査に期待したい。



第48図 出雲国分寺跡寺域区画溝推定位置図（S=1/1000）
 (松江市文化財調査報告書第96集「出雲国分寺跡発掘調査報告書」2004年の第78図に加筆)

遺物観察表(土器)

種類 番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	測量等	残存状況	備考
9-1	須恵器	环	口径:11.8(推) 底径:6.0(推) 高さ:4.2	長石微粒をわずかに含む	良好	外面:灰色 内面:灰褐色 断面:灰褐色	外面:回転ナデ 内面:余切り 断面:回転ナデ	1/2周残存。	重ね焼きの色の変化有り
11-1	土師器	蓋	口径:11.6(推) 底径:9.4(推)	1mm前後の石英、共晶粒を密に含む	良	外面:淡赤褐色 内面:灰褐色 断面:淡赤褐色	外面:風化 内面:灰褐色 断面:灰褐色	約1/4周部残存するが、底部は欠損。	
11-2	土師器	蓋	口径:23.2(推) 底径:20.0(推)	1mm前後の石英・長石粒を密に含む	やや軟	外面:淡赤褐色 内面:淡赤褐色 断面:淡赤色	外面:風化 内面:風化	約1/4周残存。接合小口の破片多数有り。	
11-3	土師器	蓋	口径:20.4(推) 底径:17.6(推)	1mm前後の石英・長石粒を非常に多く含む	良好	外面:淡赤褐色 内面:淡赤褐色 断面:灰褐色	外面:ヨコナデタケメ 内面:ヨコナデハラカズリ	口縁部周辺のみ約1/4周残存。	
11-4	土師器	蓋	口径:21.8(推) 底径:17.4(推) 剥離量最大:1.7cm 厚さ:23.8(推)	1mm前後の石英・長石粒を密に含む	やや軟	外面:淡赤褐色 内面:淡赤褐色 断面:淡赤色	外面:ヨコナデハケメ 内面:ヨコナデハケメ	約手縁残存するが、接合是不可能。	
21-1	須恵器	高台付	口径:17.0 底径:10.3	石英・長石微粒を密に含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	圓小部が約1/5周残存。	ろくろ:右回転
21-2	須恵器	环	底径:8.0(推)	石英・長石微粒を多く含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 内面:余切り 断面:回転ナデ	底部付近が約1/6周残存。	ろくろ:右回転
27-1	土師質土器	足高台付の环	口径:11.4 底径:7.9 高さ:6.6	石英・長石・ウンモの微粒を少々含むが細密	良	外面:白褐色の上に赤褐色斑 内面:白褐色の上に赤褐色斑 断面:一部深黒色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 断面:回転ナデ	完形。	ろくろ:右回転
27-2	土師質土器	足高台付の环	口径:13.6 底径:7.7 高さ:6.4		細密	外面:淡赤褐色 内面:淡赤褐色 断面:やや赤色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	底部完存。环部は約1/2周部が残存。	ろくろ:左回転
27-3	土師質土器	高台付环	口径:14.0 底径:8.7 高さ:7.0	石英微粒をわずかに含む	やや軟	外面:淡白色 内面:淡白色 断面:淡白色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	完形で出土したと思われるが、接合不可能。器面剥離が著しい。	ろくろ:不明
27-4	土師質土器	碗	口径:15.1(推)	石英・長石微粒を少々含む	軟	外面:灰色 内面:淡灰色 断面:灰褐色	外面:回転ナデ 内面:風化者らしい 内面:回転ナデ 断面:風化者らしい	脇部のみ約1/5周残存。	ろくろ:不明
27-5	土師質土器	高台付环			軟	外面:白褐色一調 内面:白褐色 断面:白褐色一調	外面:風化 表面 内面:風化 表面	圆小部が約半周残存。器面剥離著しい。	ろくろ:不明
27-6	土師質土器	环	口径:15.0	石英・長石微粒を多く含む	やや軟	外面:淡灰褐色 内面:淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	环体部のみ1/4周残存。	ろくろ:右回転
27-7	土師質土器	高台付环		石英・長石微粒をわずかに含む	軟	外面:白褐褐色 内面:白褐褐色 断面:白褐褐色	外面:風化 表面 内面:回転ナデ 断面:風化者らしい	环底部と高台のつぶれ根が若干残存。	ろくろ:不明
27-8	土師質土器	高台付直	口径:15.2(推)	石英・長石微粒を密に含む	良好	外面:淡灰褐色 内面:淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 断面:風化	5×4cm程度残存。ろくろ:不明	
27-9	須恵器	盤	口径:30.6(推)	板密	やや軟	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	体部のみ約7cm程度残存。	ろくろ:右回転
27-10	土師質土器 (小型)	环	底径:6.0(推)	石英・長石微粒を密に含む	やや軟	外面:淡灰褐色 内面:淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:風化 表面 内面:回転ナデ 断面:風化者らしい	底部付近が約1/4周残存。	ろくろ:不明
30-1	須恵器	环	口径:11.7 底径:6.8 高さ:3.8 最大厚さ:12.2	石英・長石微粒を多く含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 内面:余切り 内面:回転ナデ 断面:後不定方向のナデ	約1/4周残存。	ろくろ:右回転
33-1	須恵器	蓋	口径:14.2	石英・長石微粒を若干含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 断面:静止ナデ	約1/8周残存。	ろくろ:右回転
33-2	須恵器	高台付环	底径:12.4	長石微粒を密に含む	やや軟	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 内面:底部余切り 内面:回転ナデ	底部付近が1/4周残存。	ろくろ:右回転

標図 番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	測定等	残存状況	備考
33-3	須恵器	高台付皿	口径:16.4(推) 底径:13.5(推) 厚さ:5.1	長石・長石微粒を少々含む	やや軟	外面:灰色一褐色 内面:褐色 断面:褐色	外面:回転ナデ 内面:ナデ 内面:回転ナデ	幅約5cm残存。	ろくろ:不明
35-1	土師器	蓋	口径:20.8(推) 底径:14.8(推)	1mm前後の石英 粒を多く含む	やや軟	外面:白褐色 内面:白褐色 断面:白褐色	外面:風化 内面:風化 ケス リの痕跡有り	約1/6周残存。	
44-1	須恵器	蓋	つまみ桙:2.1	石英・長石微粒 を少々含む	やや軟	外面:淡灰褐色 内面:淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:糸切り後回 転ナデ及び回転 ハラカズリ 内面:回転ナデ後 不対称方向のナデ	器部が約1/4周 残存。	ろくろ:左回転
44-2	須恵器	高台付环	底径:9.2	石英・長石微粒 を多く含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 底部回転ナデ 内面:回転ナデ		ろくろ:不明
44-3	須恵器	高台付环	底径:9.2(推)	石英・長石微粒 を密に含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 糸切り 内面:回転ナデ	底部付近約1/5周 残存。	ろくろ:右回転
44-4	須恵器	高台付环	底径:9.3	石英・長石微粒 を多く含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰褐色	外面:回転ナデ 糸切り 内面:回転ナデ後 静止ナデ ヘラで 押さえて一部沈没	底部のみ約1/4周 残存。	ろくろ:不明
44-5	須恵器	皿	底径:10.5(推)	石英・長石を少々含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:回転ナデ 糸切り 内面:回転ナデ	器部が約1/6周 残存。	ろくろ:右回転
44-6	須恵器	高台付环	底径:9.0	石英・長石微粒 を若干含む。	良好	外面:灰色 内面:淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	5×5cm程度残存。	ろくろ:右回転
44-7	須恵器	高台付环	底径:6.6(推)	石英・長石微粒 を少々含む	良	外面:白色 内面:白色 断面:白色	外面:回転ナデ 糸切り 内面:回転ナデ	底部周辺が約1/4 周残存。	ろくろ:右回転
44-8	須恵器	甕		石英・長石微粒 を多く含む	良好	外面:灰色 内面:灰色 断面:灰色	外面:難な波状文 内面:回転ナデ	4×7cm程度残存。	ろくろ:不明
44-9	土師質器	高台付碗		石英・長石の質 粒を少々含む	軟	外面:接地部附近 淡灰褐色 内面:接地部周辺 淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:風化 内面:風化	1/6周弱残存。	
44-10	青磁	碗		若干小砂粒が混 じる	堅軟	外面:淡褐色 内面:淡褐色 断面:淡褐色	外面:風化 内面:風化	若干細部が残存し たと思われるが、 接合不可能。	
44-11	陶器	皿	底径:14.6(推)	石英・長石微粒 を少々含む	良好	外面:透明粒かか る淡灰褐色 内面:透明粒かか る淡灰褐色 断面:淡灰褐色	外面:施釉ところ どころ砂目 内面:施釉	底部が約1/4周残 存。	ろくろ:不明
45-1	土師器	甕	口径:21.8(推) 底径:12.2(推)	石英・長石微粒 を多く含む	良	外面:淡褐色 内面:淡褐色 断面:淡褐色	外面:ヨコナダ ^{タマハナ} 後ヨコ ナダ 内面:ヨコナダ ^{タマハナ} 後ヨコ ナダ	完存していたと思 われるが、接合で きたのは約1/4周 程度。	
46-1	土製品	土師	長さ:3.9 最大径:11.0 孔径:5.1	石英・長石微粒 を少々含む	やや軟	外面:黒色 内面:黒色 断面:黒色	手捏ね	完形	

* (推)とは復元推定値を表す。

遺物観察表(瓦)

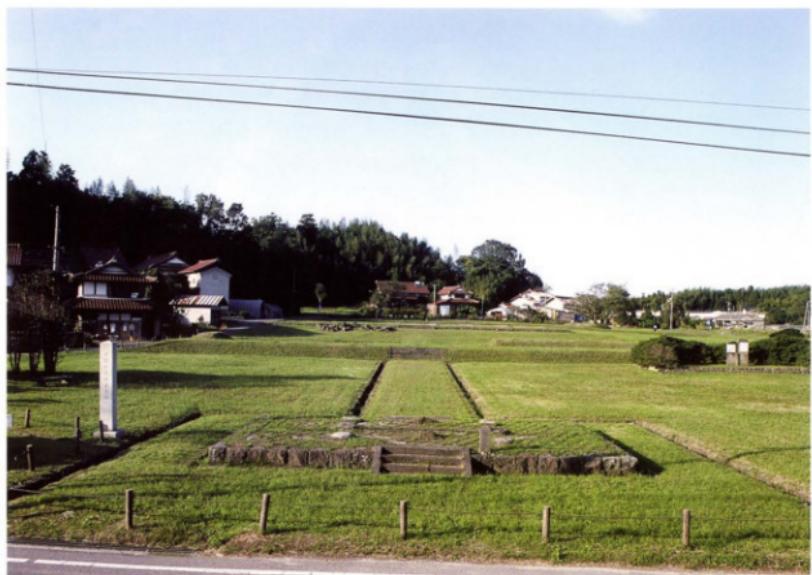
編番	種類	法量(cm)	胎土	焼成	色調	測量等	残存状況	備考
10-1	平瓦(土師質)	最大高:5.5 最大厚:2.2	長石とわずかな石 英微粒を含む	不良	外面: 黄灰褐色 断面: 黄灰褐色 内面: 暗灰色	外面: 風化が著しい 断面にケズリ 内面: 塩目タキ	最大残存: 9.3× 15.8cm	
10-2	平瓦(土師質)	最大高:2.3 最大厚:2.3	長石とわずかな石 英微粒を含む	不良	外面: 暗灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 布目 塩部に ケズリ 内面: 塩目タキ	最大残存: 12.8× 9.3cm	
14-1	丸瓦(土師質)	全長:35.0 幅:16.8 最大高:8.3 最大厚:2.1	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 部布目が残 る 端部にケズリ	完形	
14-2	丸瓦(土師質)	全長:35.8 幅:16.9 最大高:8.2 最大厚:2.1	長石微粒を含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 風化が著しい 端部にケズリ	完形	
15-1	丸瓦(土師質)	全長:35.4 幅:17.0 最大高:7.8 最大厚:2.2	長石微粒を含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 一部布目が残 る 端部にケズリ	ほぼ完形	
15-2	丸瓦(土師質)	全長:35.8 幅:16.6 最大高:7.5 最大厚:2.0	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 部布目が残 る 端部にケズリ	ほぼ完形	
16-1	丸瓦(土師質)	全長:33.3 幅:16.5 最大高:8.2 最大厚:2.3	長石微粒を含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 部布目が残 る 端部にケズリ	完形	
16-2	丸瓦(土師質)	全長:35.3 幅:16.0 (17.0) 最大高:8.0 最大厚:2.1	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 一部布目が残 る 端部にケズリ	ほぼ完形	
17-1	丸瓦(土師質)	全長:35.5 幅:16.8 最大高:8.0 最大厚:1.7	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 白灰色 断面: 淡灰色 内面: 白灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 部布目が残 る 端部にケズリ	ほぼ完形	
17-2	丸瓦(土師質)	全長:35.7 幅:16.6(推) 最大高:7.7 最大厚:2.3	長石微粒を含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 部布目が残 る 端部にケズリ	約9割	
18-1	丸瓦(土師質)	全長:36.4 幅:15.4 最大高:8.1 最大厚:1.9	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 一部布目が残 る 端部にケズリ	ほぼ完形	
18-2	丸瓦(土師質)	全長:36.8 幅:16.2 最大高:7.6 最大厚:2.0	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 白灰色 内面: 淡灰色	外面: 淡目タキの 後ナデ やや風化 内面: 部布目が残 る 端部にケズリ	約8割	
19-1	丸瓦(土師質)	最大高:7.3 最大厚:1.3	長石微粒を含む	やや良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 布目 内面: 布目	最大残存: 16.1× 9.3cm	
19-2	丸瓦(土師質)	最大高:8.8 最大厚:2.0	わずかに長石微粒 を含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: ナデ 風化 が著しい 内面: 布目がわずか に残る	最大残存: 10.3× 11.0cm	
19-3	平瓦(4引窓質)	全長:35.5 幅:26.7 最大高:6.5 最大厚:2.6	長石とわずかな石 英微粒を含む	やや良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 布目 端部に ケズリ 内面: 淡目タキ	約8割	
19-4	平瓦(土師質)	最大高:3.6 最大厚:1.9	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 淡灰色 内面: 淡灰色	外面: 風化が著しい 内面: 塩目タキ	最大残存: 8.7× 7.0cm	
19-5	平瓦(土師質)	最大高:2.2 最大厚:1.9	石英・長石微粒を 含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 白灰色 内面: 淡褐色	外面: 風化が著しい 内面: 風化が著しい	最大残存: 10.6× 7.2cm	
22-1	軒丸瓦(土師質)	瓦当直径: 15.0(推)	わずかに長石微粒 を含む	不良	外面: 淡灰色 断面: 白灰色 内面: 淡褐色	外面: 瓦当 (風化が著しい)	瓦当面のみ約半分	
22-2	軒丸瓦(須恵質)	瓦当直徑: 15.0(推)	石英・長石微粒を 含む	良	外面: 白色 断面: 白色 内面: 白色	外面: 瓦当 (風化が著しい)	瓦当面のみ約1/3	
22-3	丸瓦(須恵質)	最大高:5.5 最大厚:1.5	長石微粒を含む	良	外面: 白色 断面: 白色 内面: 白色	外面: ナデ 内面: 布目 端部に ケズリ	最大残存: 16.6× 8.0cm	
22-4	丸瓦(須恵質)	最大高:8.0 最大厚:1.6	長石微粒を含む	良	外面: 白色 断面: 白色 内面: 白色	外面: 布目 内面: 布目 端部に ケズリ	最大残存: 17.3× 9.7cm	

標本番号	種類	法量(cm)	胎土	焼成	色調	測量等	残存状況	備考
22-5	丸瓦(須恵質)	最大高:5.5 最大厚:1.6	長石微粒を含む	良	外面:灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:ナデ ケズリ 内面:布目 端部:ケズリ	最大残存:6.7× 10.0cm	玉縁
22-6	丸瓦(須恵質)	最大高:5.4 最大厚:2.6	長石微粒を含む	良	外面:灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:ナデ 内面:布目 端部:ケズリ	最大残存:6.5×6.0 cm	玉縁
22-7	丸瓦(上師質)	最大高:8.8 最大厚:2.7	石英・長石微粒を含む	不良	外面:灰色 断面:灰色 内面:淡褐色	外面:ナデ 風化が 著しい 内面:布目がわずかに 残る	最大残存:16.5× 14.3cm	玉縁
23-1	軒瓦(土師質)	最大高:3.0 最大厚:4.6	石英・長石微粒を含む	不良	外面:淡灰色 断面:灰色 内面:淡灰色	外面:布目 線状模様 端部:ケズリ 内面:風化が著しい	最大残存:22.4× 25.6cm	
23-2	平瓦(土師質)	最大高:5.2 最大厚:2.0	石英・長石微粒を含む	不良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:布目がわずかに 残る 端部:ケズリ 内面:網目タタキ	最大残存:12.1× 18.4cm	
23-3	平瓦(須恵質)	最大高:2.9 最大厚:2.2	わずかに長石微粒を含む	良	外面:無灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:布目 斜線 端部:ケズリ 内面:端日タタキ+ 斜線	最大残存:13.9× 8.7cm	
23-4	平瓦(土師質)	最大高:4.6 最大厚:3.0	石英・長石微粒を含む	不良	外面:白色 断面:灰色 内面:白色	外面:風化が著しい 端部:ケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:10.8× 17.0cm	
23-5	平瓦(土師質)	最大高:2.8 最大厚:2.2	石英・長石微粒を含む	不良	外面:有灰色 断面:淡褐色 内面:白色	外面:風化が著しい 内面:網目タタキ	最大残存:7.9×7.8 cm	
23-6	平瓦(須恵質)	最大高:4.4 最大厚:2.1	石英・長石微粒を含む	良	外面:灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:布目 端部:ケズリ 内面:格子目タタキ ヘラによる斜方向 ライン剥離	最大残存:12.3× 13.4cm	
23-7	平瓦(土師質)	最大高:4.5 最大厚:2.1	石英・長石微粒を含む	不良	外面:淡灰色 断面:淡褐色 内面:淡灰色	外面:風化が著しい 内面:格子目タタキ (風化が著しい)	最大残存:10.5× 9.3cm	
28-1	縛(須恵質)	最大厚:5.7	長石微粒を含む	良	外面:淡灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:ケズリ 内面:ケズリ	最大残存:9.1×8.4 cm	側面に乾燥時 のわら跡有
28-2	丸瓦(須恵質)	最大高:5.5 最大厚:2.0	長石微粒を含む	良	外面:淡灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:ナデ 内面:布目 端部:ケズリ	最大残存:7.9×6.3 cm	
28-3	平瓦(土師質)	最大高:6.8 最大厚:2.1	石英・長石微粒を含む	不良	外面:淡灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:布目 端部:ケズリ 内面:網目タタキ	最大残存:23.7× 23.6cm	
34-1	丸瓦(須恵質)	最大高:6.7 最大厚:2.1	わずかに長石微粒を含む	やや良	外面:暗灰色 断面:淡灰色 内面:暗灰色	外面:ナデ 一部ヘ ラによる横方向剥 離有り	最大残存:14.3× 9.8cm	
34-2	平瓦(須恵質)	最大高:3.5 最大厚:2.0	わずかに長石微粒を含む	良	外面:有灰色 断面:白色 内面:白色	外面:布目 内面:格子目タタキ	最大残存:10.5× 10.4cm	
34-3	平瓦(土師質)	最大高:2.3 最大厚:1.9	石英・長石微粒を含む	不良	外面:灰褐色 断面:灰色 内面:暗褐色	外面:端日 わらかに 残る 端部:ケズリ 内面:網目タタキ	最大残存:9.1×8.4 cm	
37-1	平瓦(須恵質)	最大高:3.5 最大厚:2.8	石英・長石微粒を含む	良	外面:暗灰色 断面:灰色 内面:暗灰色	外面:布目 端部:ケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:11.6× 7.6cm	
37-2	平瓦(土師質)	最大高:3.6	わずかに長石微粒を含む	不良	外面:淡黃褐色 断面:淡褐色 内面:淡褐色	外面:布目 端部:ケズリとナデ	最大残存:9.8× 12.6cm	
40-1	丸瓦(須恵質)	最大高:4.7 最大厚:1.6	長石微粒を含む	良	外面:淡灰色 断面:淡赤灰色 内面:灰色	外面:ナデ 滑澤に ケズリ 内面:布目 端部:ケズリ	最大残存:6.2×9.1 cm	玉縁
40-2	丸瓦(土師質)	最大厚:2.0	石英・長石微粒を含む	不良	外面:淡灰色 断面:灰色 内面:淡灰色	外面:風化が著しい 内面:風化が著しい	最大残存:4.9×6.1 cm	
40-3	丸瓦(土師質)	最大厚:1.9	石英・長石微粒を含む	不良	外面:白色 断面:灰色 内面:白色	外面:風化が著しい 内面:風化が著しい	最大残存:3.9×6.0 cm	
40-4	丸瓦(土師質)	最大高:6.7 最大厚:2.0	石英・長石微粒を含む	やや良	外面:白色 断面:白色 内面:白色	外面:溝目タタキの 後ナデ やや風化 内面:布目	最大残存:15.8× 5.4cm	
40-5	平瓦(須恵質)	最大高:3.1 最大厚:2.3	石英・長石微粒を含む	やや良	外面:淡灰色 断面:赤褐色 内面:淡褐色	外面:布目 端部:ケズリ 内面:溝目タタキが わずかに残る	最大残存:5.4×4.7 cm	

標図 番号	種類	法京(cm)	粒上	焼成	色調	測量等	残存状況	備考
40-6	平瓦(須恵質)	最大高:1.7 最大厚:1.5	長石微粒を含む	良	外面:濃灰色 断面:褐色 内面:濃灰色	外面:布目 内面:繩目タタキ	最大残存:4.1×3.2 cm	
41-1	丸瓦(須恵質)	最大高:2.6 最大厚:2.0	長石微粒を含む	やや良	外面:黒褐色 断面:褐色 内面:褐色	外面:風化が著しい 内面:風化が著しい	最大残存:16.5× 7.4cm	
41-2	平瓦(土師質)	最大高:4.1 最大厚:2.2	長石微粒を含む	やや良	外面:白色 断面:白色 内面:白色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:繩目タタキ	最大残存:13.1× 13.2cm	
41-3	平瓦(土師質)	最大高:4.8 最大厚:2.1	長石微粒を含む	不良	外面:白色 断面:白色 内面:白色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:格子目タタキ やや風化	最大残存:19.2× 9.5cm	
41-4	平瓦(須恵質)	最大高:2.3 最大厚:1.9	長石微粒を含む	良	外面:灰色 断面:灰色 内面:灰色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:繩目タタキ, ケ ズリ	最大残存:14.0× 9.5cm	
41-5	平瓦(須恵質)	最大高:4.5 最大厚:2.8	長石微粒を含む	やや良	外面:暗灰色 断面:暗灰色 内面:暗灰色	外面:風化が著しい 端部にケズリ 内面:格子目タタキ 風化が著しい	最大残存:11.5× 10.0cm	
41-6	平瓦(須恵質)	最大高:3.3 最大厚:2.0	石英・長石微粒を 含む	良	外面:暗灰色 断面:灰色 内面:暗灰色	外面:風化が著しい 端部にケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:9.3× 10.0cm	
43-1	軒丸瓦(須恵質)	瓦当直径: 14.5cm	わざかに長石微粒 を含む	良	外面:暗灰色 断面:淡灰色 内面:暗灰色	外面:瓦当	瓦当面のみ約1/4	
43-2	丸瓦(土師質)	最大高:7.1 最大厚:2.9	長石微粒を含む	やや良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:ナデ 内面:布目	最大残存:12.0× 8.8cm	
43-3	丸瓦(土師質)	最大高:6.8 最大厚:2.1	石英・長石微粒を 含む	不良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:ナデ 内面:布目	最大残存:21.7× 11.3cm	
43-4	丸瓦(須恵質)	最大高:7.3 最大厚:2.0	石英・長石微粒を 含む	良	外面:暗灰色 断面:淡灰色 内面:暗灰色	外面:ナデ やや風 化 内面:布目 端部に ケズリ	最大残存:11.1× 10.0cm	
43-5	平瓦(須恵質)	最大高:5.5 最大厚:2.5	長石微粒を含む	良	外面:灰色 断面:暗灰色 内面:灰色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:16.4× 15.2cm	
43-6	平瓦(須恵質)	最大高:3.0 最大厚:1.6	長石微粒を含む	良	外面:灰色 断面:暗灰色 内面:暗灰色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:9.7×6.6 cm	
43-7	平瓦(土師質)	最大高:5.5 最大厚:2.7	石英・長石微粒を 含む	やや良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:繩目タタキ	最大残存:8.7× 14.4cm	
43-8	平瓦(土師質)	最大高:4.0 最大厚:2.5	石英・長石微粒を 含む	不良	外面:暗灰色 断面:暗灰色 内面:暗灰色	外面:風化が著しい 端部にケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:16.1× 10.0cm	
47-1	軒丸瓦(須恵質)	瓦当直径: 14.4	長石微粒を含む	良	外面:暗灰色 断面:暗灰色 内面:暗灰色	外面:瓦頭	瓦当面のみ完存	
47-2	軒丸瓦(土師質)	瓦当直径: 14.7	石英・長石微粒を 含む	不良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:瓦頭(風化が 著しい)	瓦当面のみ約半分	
47-3	丸瓦(須恵質)	最大高:5.7 最大厚:2.3	長石微粒を含む	良	外面:淡灰色 断面:暗灰色 内面:淡灰色	外面:ナデ 端部に ケズリ 内面:布目	最大残存:11.5× 8.2cm	
47-4	丸瓦(須恵質)	最大高:8.1 最大厚:1.9	長石微粒を含む	やや良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:暗灰色	外面:ナデがわざか に残る 内面:布目 端部に ケズリ	最大残存:8.6×9.9 cm	
47-5	平瓦(土師質)	最大高:5.0 最大厚:2.5	石英・長石微粒を 含む	やや良	外面:淡灰色 断面:淡灰色 内面:淡灰色	外面:布目 に残る 内面:繩目タタキ	最大残存:14.3× 12.5cm	
47-6	平瓦(須恵質)	最大高:3.7 最大厚:1.9	長石微粒を含む	良	外面:淡灰色 断面:暗灰色 内面:濃灰色	外面:布目 端部に ケズリ 内面:格子目タタキ	最大残存:9.8×9.0 cm	
47-7	平瓦(土師質)	最大高:4.6 最大厚:2.2	長石微粒を含む	不良	外面:暗灰色 断面:白色 内面:暗灰色	外面:布目 に残る 斜方向ライン 数有り 端部にケ ズリ 内面:風化が著しい	最大残存:9.7× 11.3cm	

* (推) は復元推定値を表す。

写 真 図 版



出雲国分寺史跡指定地（南から）



調査前近景（西から）



A区調査終了後（西から）



B区北壁土層



B区遺構（西から）
(手前がSX01、奥が瓦敷遺構 I)



SX01 (東から)



SX01 (部分)



瓦敷遺構 I (西から)



瓦敷遺構 I (部分)



瓦敷遺構 I と北壁土層



SD01 (西から)



SD01遺物出土状況（南から）



粘土採掘坑調査終了後（西から）



D区完掘状況（南西から）



D区北壁土層



E 区完掘状況（東から）



SD02北壁土層



瓦敷遺構Ⅱ（南から）



瓦敷遺構Ⅱ（東から）



F 区北壁土層



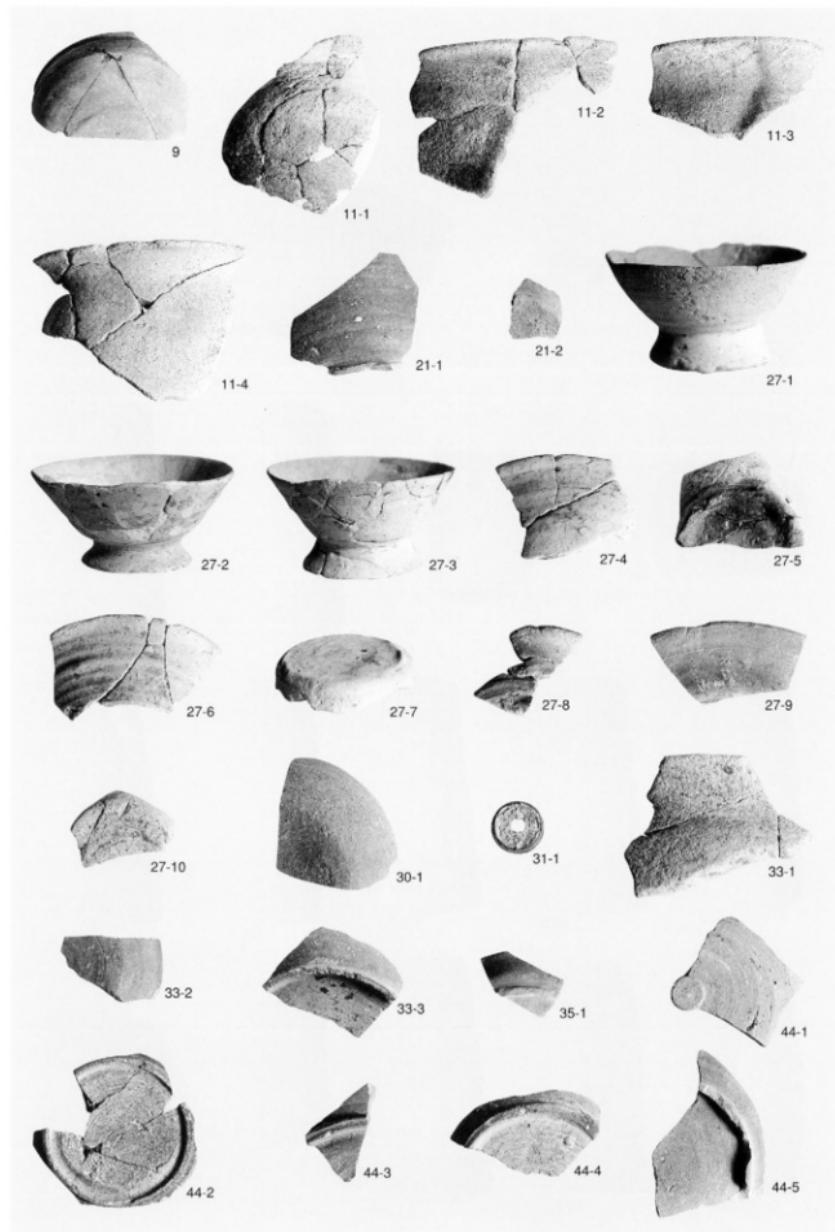
F 区土師器出土状況



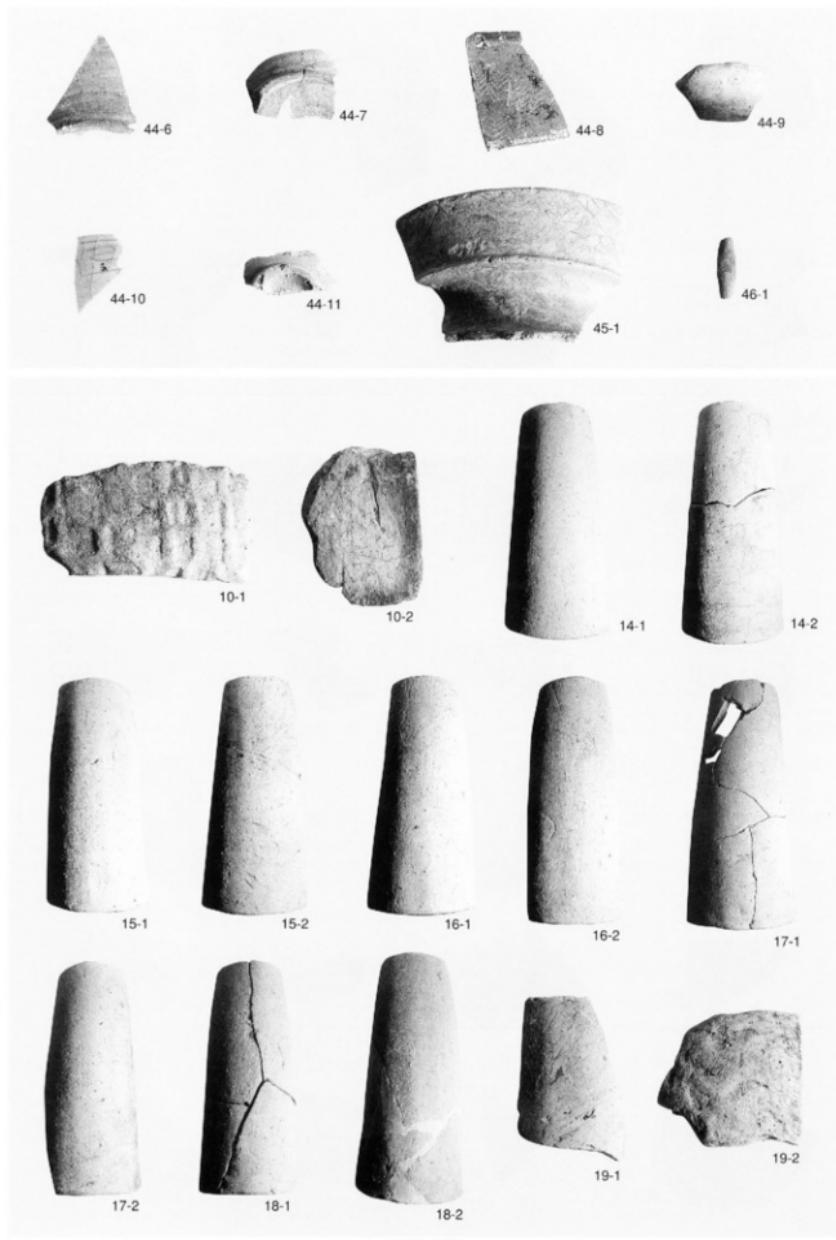
調査完了後全景（東から）



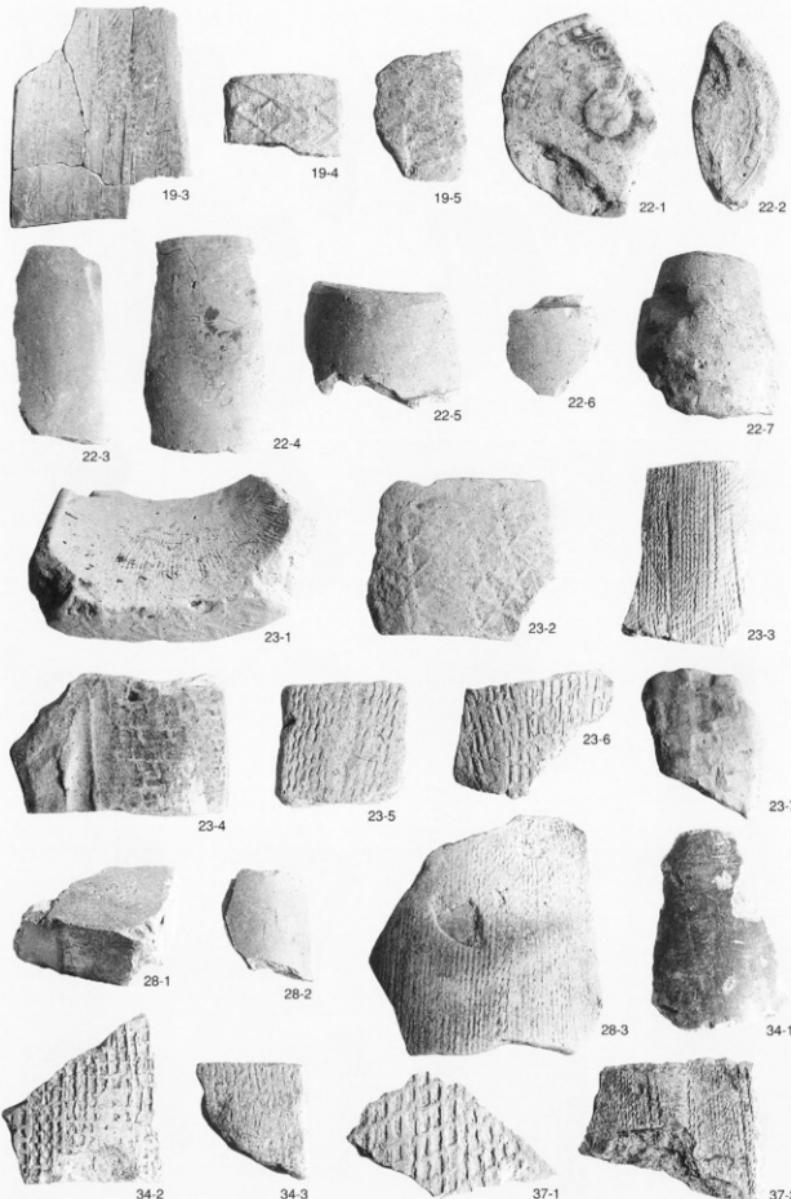
現地説明会風景



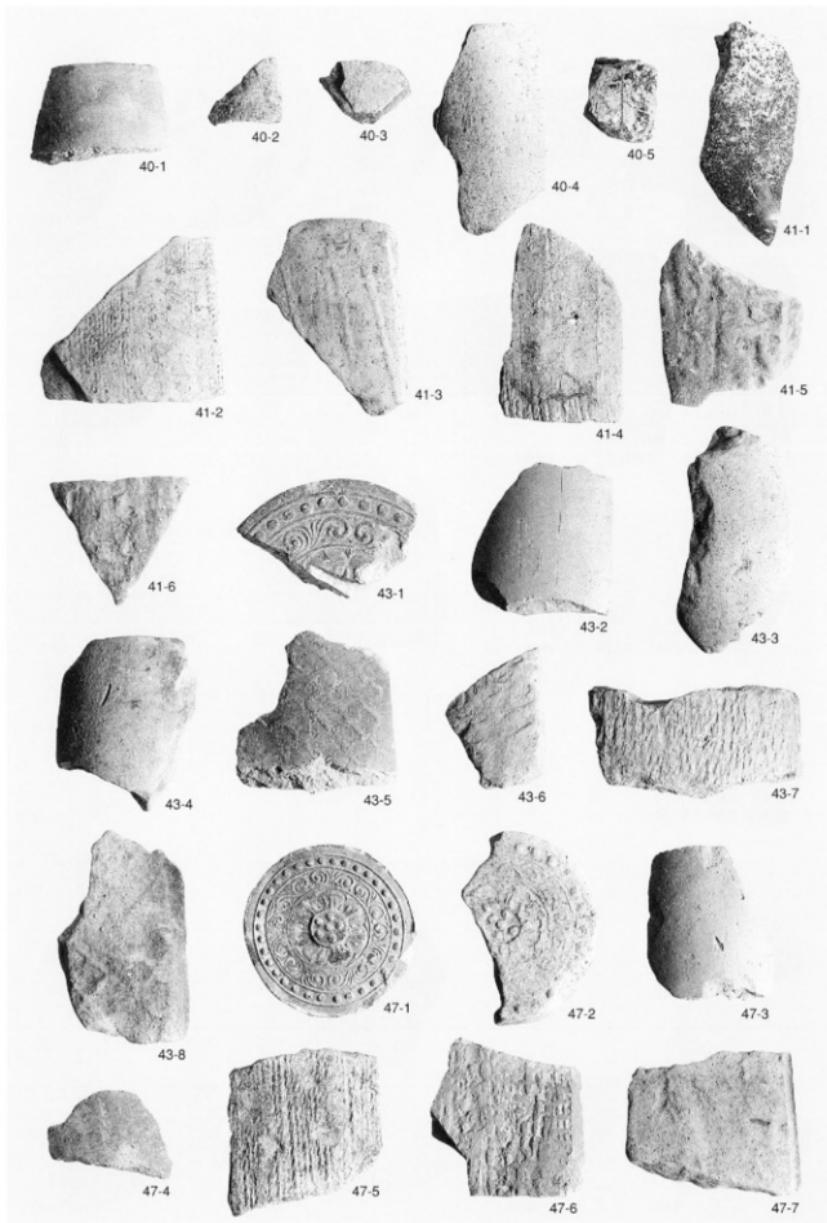
出土遺物



出土遗物



出土遺物



出土遗物

報告書抄録

ふりがな	やえがきじんじやちくやせんちくやこうくちいきかつきょくきばんそうぞうこうふきん (かいりょう) じぎょうにともなういすもこくぶんじあとはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	八重垣神社竹矢線竹矢工区地域活力基盤創造交付金(改良)事業に伴う出雲国分寺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第134集						
編著者名	江川幸子・福光龍治						
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1			TEL: 0852-55-5284 TEL: 0852-85-9210			
発行年月	平成22年5月20日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
いすもこくぶんじあわせ 出雲国分寺跡	島根県 松江市 竹矢町 442-1 453-11 454-6	32201	A012	35°26'17" 133°06'39"	平成21年 7月1日 ～ 平成21年 10月16日	706m ²	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
出雲国分寺跡	寺院跡	古墳時代 奈良時代		瓦敷遺構 溝 粘土探掘坑	土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 瓦	出雲国分寺跡	

出雲国分寺跡発掘調査報告書

平成22(2010)年5月

発行 松江市教育委員会
島根県松江市末次町86番地

財団法人松江市教育文化振興事業団
島根県松江市島根町加賀1263-1

印刷 藤谷印刷
島根県松江市東長江町902-59